

殷墟前半期の青銅彝器の編年と流派の認識

難波純子

【要約】 本稿は、殷墟前半期の青銅彝器をとりあげ、流派という新たな概念を導入して紋様の変遷過程を明らかにした上で、その編年案を整理し直し、さらにこの編年案と铸造のための铸型や工房についての検討をふまえて、流派の成立の要因や青銅器製作工人の動向を探ることにより、殷代社会における青銅器生産機構解明の手がかりを得ることを目的とする。學には、器形の異なる二種類の小形式があるが、各々に飾られる紋様は、二里岡期の二種の紋様をそれぞれ受け継いだ異系統の紋様として捉えることができる。さらにそれらは器種を超えて存在することから、各々を飾る青銅器群を細線派・太線派の二大流派として捉えることにした。次に、各器種について型式学的な検討を加え、殷墟前半期を大きく二つの小期に分けて、各期の各流派の様相をも検討した。この年代観をふまえて、流派と铸型施紋法・铸造技術との相関関係や小屯宮殿区出土铸型を分析した結果、本稿で設定した流派とは、単に紋様デザインの異なる群であるばかりではなく、製作工程全般にかかわる差異を持つ青銅器群に対応するものであり、それを製作した工人群の差異を表わしていると考えらるに至った。

史林 七三卷六号 一九九〇年十一月

一 はじめに

紀元前十三世紀、殷の第十八代帝盤庚は黄河の北に都を定め、その後、殷は帝武丁の時に大いに栄えたという。この殷代後期(殷墟期)の黄河の北の都こそが、現在の河南省安陽市郊外の小屯村を中心とする通称殷墟にあたることはよく知られている。

私は以前、殷墟期の前段階にあたる二里頭期・二里岡期の青銅彝器(以下、青銅器と略す)をとりあげて発達の様相につい

て論じ、器形・装飾・器種構成・鑄造技術等の諸要素が時には相互に作用しながら変化・発達してゆくことを明らかにした。^① 殷墟期に至って、青銅器はこうした過程をひきついでさらに発達をとげ、成熟期を迎えるのであるが、それに伴って、青銅器製作に携わった工人の組織も拡大していったことが充分想像される。本稿では殷墟前半期の青銅器をとりあげ、紋様表現の異なる流派を設定した上で多様な観点から青銅器を検討することによって、流派の成立の要因や青銅器製作工人の動向を探り、殷代社会における青銅器生産機構解明の手がかりを得ることを目的とする。この検討を行なうためには、細密な編年案が不可欠なので、第一に各流派の紋様の変遷過程を明らかにした上で編年案を整理し直したい。

最初に、近年特にめざましく進展してきた編年研究の現状について、概観する。

マックス・レールは、殷周青銅器の紋様の大まかな発達過程を明らかにした。^② 紋様という全器種に共通する要素がとりあげられたことによって、青銅器全体の編年作業が一挙に進められた。その後、この発達順序は発掘調査で出土した資料によっても概ね裏付けられ、定説化しつつある。

一方、一九五〇年代以来、発掘調査によって青銅器が出土する例が増してきた。そして、遺構ごとの一括出土資料の序列を決定し、共伴する土器の型式を介して、分期の大枠が形作られた。^③ さらに一九八〇年代までに次々に発表された鄒衡・林巳奈夫^④・鄒振香・陳志達^⑤の研究やウルスラ・リニエルトの鼎の研究等^⑥は、青銅器の器形の変化を重視して、型式学的な編年を行なったものである。器形の変化の過程もまた、こうした先学の研究によってかなり明らかになっている。

林巳奈夫は『殷周時代青銅器の研究』において器形の変遷過程を跡づけた後に、『殷周時代青銅器紋様の研究』^⑦で、種類や表現方法によって分類した紋様各種の変遷を器形による時代観にそって分析した。殷周から戦国時代にわたる青銅器の編年は、林の研究によって大きく前進したが、これら両書中では、林の分類した紋様の種類やその変化の諸様相と、器形の変遷過程との細かい対応関係について言及されていない。陳公柔・張長寿もまた紋様、特に饗養紋(獣面紋)の複数の系統を明らかにしたうえで、各々の変遷を辿る研究を最近発表した^⑧が、ここでも、その成果が器種や器形の研究とは充

分に結びつけられていない。このように従来の青銅器の編年研究は、紋様・器形・铸造技術という三つの主要な観点からアプローチが行なわれているが、このことは最も大きな問題である。従来、総合的な編年研究が進まなかった理由は何であろうか。拙稿「初現期の青銅葬器」では、各器種内に存在する器形の異なる複数の「小形式」および、紋様帯構成や単位紋様の組合わせ等を異にする複数の「系統」を分類せずに、一系列的な編年ばかりが試みられてきた結果であると考えた。^⑩ 股壺期の青銅器については、林や陳・張の研究では、画像の対象物や形状について、かなり詳しい分類が行なわれているが、分類の不十分な点があり、また、なによりも紋様の変遷と器形の変遷とを対応させることが彼らの目的ではなかったため、編年研究が総合的に行なわれなかったのではないだろうか。しかし、特に股壺前半期の青銅器は、大きく変化するため、いま、各研究者による器形や紋様等の研究成果を総合してより細密な型式変遷を跡づけることが必要と思われる。

ところで、一九四〇年よりベルンハルト・カールグレンが発表した一連の研究によると、股代の青銅器の紋様はA群・B群・C群の三つのグループに分けられ、その組合わせがA群とC群、B群とC群に限られて、A群とB群を混用するものはないことから、A群とB群は開始時期が異なるもので、各々の伝統を踏襲して営まれた工房で作られたのではないかと推察される。今日、A群⇩B群という新旧関係についての理解が逆転してしまったためか、あまり彼の説がとりあげられることはないように思われる。しかし、定説化しつつある編年案に照らしあわせてみても、同時期の同一器種内にカールグレンが指摘するような紋様の組合わせの異なる群が存在することは確かなようである。

一つの墓から出土する青銅器には、大きさや装飾等のほとんど同一な複数個の青銅器が含まれていることがあり、これらは一般的に同一工人群が同時に製作したものと理解される。しかし、大きさや装飾のよく似た青銅器が異なった遺構から出土したり、別の遺構から出土したと考えられるコレクション資料中に含まれていたりすることも多々ある。こうした一群の青銅器もまた同一工人群が製作したのではないかとみる考え方もある。例えばロバート・プーアは、婦好墓の透か

し彫りの願首龍紋觚と、これによく似た紋様をもつ觚の類例を集め、同一工房で作られた作品であるとしている。¹²⁾

林巳奈夫は、「殷西周間の青銅容器の編年」の中で、「器種を異にする類を通じての紋様の表現技法・種類の共通性、ないしは、装飾の理念の同一性によって結合される群を仮に流派と呼ぶことにする。」と述べた。¹³⁾これは、紋様の表現方法と紋様帯構成や装飾等に相関関係があることを認め、それによって分別される、時代を超えて継続する群を「流派」と称したものである。カールグレンやブーアらの称える説もまた、紋様表現方法と紋様帯構成の間の相関関係を漠然とながら見出したものにほかならない。

私も、紋様表現方法と紋様帯構成や装飾、時には器形にも、有機的な関係があるという考え方に賛成である。しかし、このような関係は時間と共に出没したり変化するものであるばかりでなく、例外もあるので、単純にひとつくりにして考察することは避けたい。むしろ群の違いを端的に表わすと考えられる紋様表現の違いに重点を置いて「流派」を設定したいと思う。

なお、ここで殷墟前半期とする青銅器は、後章で詳述するように筆者の殷墟銅一期・銅二期とする時期のもので、おおよそ、林の殷後期Ⅰ、鄭・陳の殷墟一期と二期の一部にあたる。「初現期の青銅彝器」では、鄭州市内で発見された資料とそれに併行する時期の資料を「二里岡期」としたから、「二里岡期」以降に位置づけられる型式の青銅器が「殷墟期」ということになる。ここでは、とりあえず殷墟発見の青銅器をすべて含めて検討したうえで、両時期を区別したい。しかし、たとえば婦好墓で出土した青銅器群には、前半期から継続する表現の紋様を飾る青銅器と共に、後半期に通有となるレール分類¹⁴⁾でいう第Ⅴ段階の新しい表現方法をとる紋様を飾る青銅器が含まれる¹⁵⁾。後者の紋様は婦好墓の例では主に大型器に用いられることから、出現した当初は、大型器用の紋様として使われていた可能性がある。便宜上、この新しい表現方法の紋様を飾る青銅器とそれ以後の型式の青銅器については別の機会に論じることにし、対象から除外している。また、青銅器生産の中心地である王都で作られた青銅器を対象を限定した方が、変遷過程をより明確にしようと思うので、広い

意味での地方型青銅器を含めないために、殷墟出土品を中心に話を進めたい。

- ① 拙稿「初現期の青銅彝器」(『史林』七二巻二号、一九八九年)
- ② M. Loehr, *The Bronze Styles of the Anyang Period, Archives of the Chinese Art Society of America*, vol. VII, 1953.
- ③ 張長寿「殷周時代の青銅容器」(『考古学報』一九七九年第三期) 22
- ④ 鄧衡「試論殷墟文化分期」(『夏商周考古学論文集』, 文物出版社, 北京、一九八〇年)
- ⑤ 林巴奈夫「殷周時代青銅器の研究」(『殷周青銅器綜覧』, 吉川弘文館、東京、一九八四年)
- ⑥ 鄭振香・陳志達「殷墟青銅器的分期与年代」(『中国社会科学院考古研究所編著『殷墟青銅器』考古学專刊乙種第二四号』, 北京、一九八五年)
- ⑦ U. Linert, *Typology of the TING in the Shang Dynasty, A Tentative Chronology of the Yin-hsu Period, Publikationen der Abteilung Asien, Kunsthistorisches Institut der Universität Köln*, 1979.
- ⑧ 林巴奈夫「殷周時代青銅器紋様の研究」(『殷周青銅器綜覧』, 吉川弘文館、東京、一九八六年)
- ⑨ 陳公柔・張長寿「殷周青銅器上獸面紋的斷代研究」(『考古学報』一九九〇年第二期)
- ⑩ 注①前掲文献「七八頁」
- ⑪ B. Karlgren, *New Studies on Chinese Bronzes, Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 9, 1937.
- ⑫ *Some Early Chinese Bronze Masters, Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 16, 1944.
- ⑬ *Once Again the A and B Styles in Yin Ornamentation, Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 18, 1946.
- ⑭ L. Poor, *The Master of the "Metropolis"-Emblem Ku, Departments of Art History and East Asian Studies, The center for Ancient Studies, University of Minnesota*, 1987.
- ⑮ 林巴奈夫「殷西周間の青銅器の編年」(『東方学報』京都、第五十冊、一九七八年) 四三頁
- ⑯ 注②前掲文献 pp. 48-49.
- ⑰ 中国社会科学院考古研究所編輯『殷墟婦好墓』(『中國田野考古報告集』考古学專刊丁種第三三号、文物出版社、北京、一九八〇年)

二 饗餞紋の二つの流派——母の紋様二種とその変遷——

「初現期の青銅彝器」において、二里岡期の饗餞紋には、

a 類 紋様が突線で表わされるもの

b 類 紋様の陽出部が広いもの

の二種類があり、両者は併存しつつ、それぞれに変化すると考えた。そして、各々 a1 ~ a3 類、b1 ~ b3 類に分類して比較したところ、a2 類と b1 類、a3 類と b2 類で表わされる饜餮紋の形状はほぼ同じであった。ノエル・バーナーの鑄型施紋法についての説を援用して考察すれば、a 類は原型を用いずに鑄型に直接紋様の輪郭を彫りこんだために、それが凸部で表わされるのに対して、b 類は原型に彫りこんだ紋様を鑄型に押捺した後、鑄造するため、紋様の輪郭が製品では凹部で表わされるのである。殷墟期の饜餮紋には、このような区別はないのだろうか。

殷墟期前半の青銅器には、主に爵・罍・鼎・觚・尊・甗等の器種が存在するが、器種によって器の大きさが異なり、紋様の大きさも異なるから、たとえ同一種類の紋様であっても、その画面に合わせて紋様の細部を変化させている可能性がある。そこでまず比較的出土例が多く時期的変遷の明らかな罍をとりあげて紋様について検討してみよう。

罍は二里岡銅四期に、B 型 3 類（饅頭形の腹部と上方へ開く頸部を持ち、断面三角形の三足を持つ型式のうち、頸部と腹部に饜餮紋帯を飾るもの）という型式が出現し、罍の諸型式は B 型 3 類に集約されていった。ところが、その二里岡銅四期の中でも最も新しい段階とした B 型 3 類には、① 頸部・腹部共に、a3 類饜餮紋を飾り、頂部斜面が外湾する iv 類柱帽を持つもの、② 頸部・腹部共に、b2 類饜餮紋を飾り、頂部斜面が内湾する v 類柱帽を持つもの、の二種類がある。一方、殷墟前半期には、B 型 3 類を踏襲した型式の罍が存在するのであるが、中に、柱帽が円錐形で、器の口径が広いものと、柱帽が截頭円錐形で器の口径が狭いものの二種の小形式があり、^③ 殷墟前半期を通じて存続する。これらは、それぞれ二里岡期 B 型 3 類の ①と②を受け継いだものと考えられ、以下、B 型 4 類、B 型 5 類と称して、区別することにする。饜餮紋の輪郭を太い凸部で表わし、その周囲を細かい線で充填する饜餮紋（輪郭饜餮紋）を除き、B 型 4 類罍と B 型 5 類罍の饜餮紋を比べてみると、B 型 4 類罍の紋様は全般的に細かく、どの部分の線もほぼ同じ太さ、同じ調子であるのに対し、B 型 5 類罍の紋様は凸部が広くて太さの不揃いな線を用いて表わされるという傾向がある。各々の中で変遷過程を辿ることができると。

B型4類罍の饜餮紋(図1-1-5)

1類 饜餮紋の角や下顎部の部分を凸線そのもので表現する点は異なるが、図に示したように、額の梯形飾・角・胴体内部の渦紋や上顎・下顎・その後方の渦紋(手・足)等の各線を比較すると、二里岡期a3類饜餮紋を忠実に写していることが明らかである。特にイ・ロ・ハとした各部分は、殷墟期の紋様では二里岡期のa3類で表わされていた各部分の意味がすっかり失われているにもかかわらず、ルジメントとして残っている。よって、これを二里岡期a3類から発達した紋様と考える。

2類 饜餮紋の顎・角の部分の後方に先端が蔵手状に巻きこみ、渦紋をつけた平行線を飾る。林巴奈夫にしたがって、これを羽根と称する。^④ 尾の先端の渦紋が数重に巻きこみ、胴体下部に目を中心とした動物紋(鳥紋)が現れる。角の内部に複雑な線が入る。

3類 羽根は長くなり、先端が鋭角をもって曲り、根元に細かい渦紋をつける定型化した形をとる。数本の羽根が角の後・尾の下・顎の後方に平行につけられる。角の下や手足の上等の部分にも羽根をつけるようになり、羽根の数も多くなる。また、尾や角の先端の渦紋が多重に巻きこむなど、紋様が細密化するものが新しいようである。

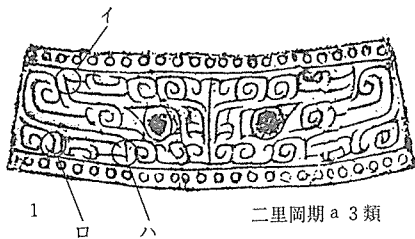
B型5類罍の饜餮紋(図1-6-9)

1類 角の後方に凸部の広い羽根をつける。

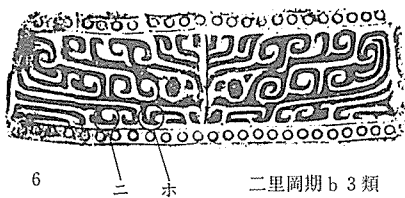
2類 尾の下に目を中心とする動物紋(鳥紋)が現れる。

3類 レール分類の第Ⅲ段階にあたり、主紋と地紋が明確に分離する。

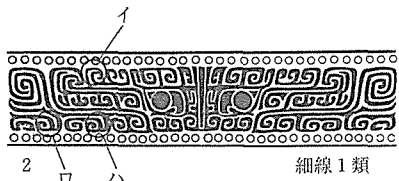
B型5類罍の1類の紋様は、凸部が広い点、および胴体内の渦紋や下顎後方の渦紋(ニ・ホ)の形状が二里岡期b2類と大変よく似ている。2類の紋様は、胴体内部の渦紋や下顎後方の渦紋(ニ・ホ)等の紋様各部の形状をよく受け継いでおり、これらの紋様は二里岡期b2類からの一連の変化過程上に位置づけることができる。



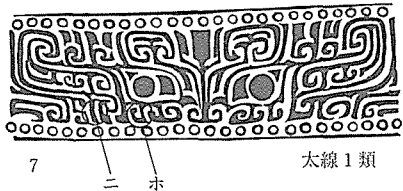
二里岡期 a 3類



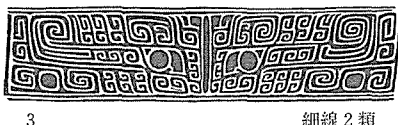
二里岡期 b 3類



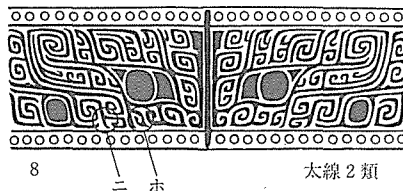
細線 1類



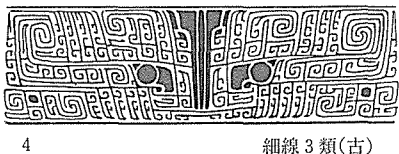
太線 1類



細線 2類



太線 2類



細線 3類(古)



細線 3類(新)



太線 3類

細線饗養紋

太線饗養紋

図1 罍の紋様2種

- (1. 鄭州白家庄M7, 2. 小屯YM333 : R2044, 3. 小屯YM232 : R2038,
4. 小屯YM388 : R2046, 5. 小屯YM188 : R2037, 6. 鄭州烟廠, 7. 小
屯YM388 : R2047, 8. 小屯YM333 : R2045)

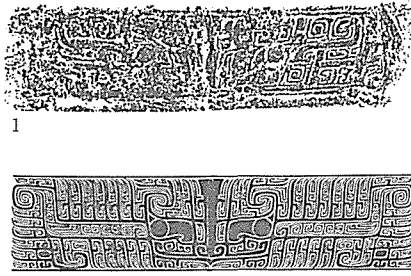


図2 輪郭饕餮紋

(1. 小屯 Y M232 : R2021爵, 2. 小屯 Y M331 : R2043罍)

このように、輪郭饕餮紋を除くと、B型4類罍の紋様は、二里岡期a類から出発し最終的に林のいう「細線饕餮紋」に、またB型5類罍の紋様は、二里岡期b類から出発し、「渦紋地・平凸・疎羽・渦紋入」饕餮紋へと到達する諸段階の紋様であると考えられる。よって、B型4類罍につけられた紋様を「細線饕餮紋」、B型5類罍につけられた紋様を「太線饕餮紋」と仮に総称することにする。^⑥ さらに、他の器種にも同様に、「細線饕餮紋」と「太線饕餮紋」を飾るものがみられる。罍以外の器種では、饕餮紋を飾る主紋帯以外に獸紋や幾何学紋等の補足的な紋様帯を飾るものが多いが、こうした紋様も概ね同様の表現上の特徴を持っている。先に述べたように、それぞれの流儀を持つデザインを受け継ぎながら通時的に存在するのみならず、器種を超えて存在するこのような群を「流派」と称して、細線饕餮紋を飾る流派を「細線派」、太線饕餮紋を飾る流派を「太線派」と呼びわける。

ただし、細線2類と太線2類は、角や胴体下部の鳥紋等、極めて類似した部分がある。両者は相互に影響関係があったのは確かであると思うが、反面、太線2類のみが太線1類を踏襲した部分を持つことや、細線2類が直線的な画面構成をとり、平行な羽根を多く配したり角や尾の巻きこみを数重にすることによって、細密な印象を与える効果を狙っている点など、つぎの細線饕餮紋3類へ連続する要素を持つことから、両者は、異系列と考えてよいであろう。

ところで、細線派とも太線派とも異なった紋様である輪郭饕餮紋(図2)は、罍のみならず、爵や觚にも主紋帯として用いられる例がある。さらに、鼎や甗には、雲雷乳釘紋や鈎連雷紋とか黼紋^⑦などと呼ばれる幾何学紋が主紋帯として用いられる例があり、また、鼎には主紋帯に獸紋を飾る例がある。これらの紋様を飾る器種もまた、右記の定義によれば「流派」と称してもよいかもしれない。しかし、通常、こ

これらの紋様は太線派の表現による紋様と共に用いられたり、共通の補足的な紋様と共に用いられたりする。すなわち、太線派の饗養紋と互換的に用いられる紋様であった可能性がある。従って、ここではあえて、細線派や太線派と同レベルの「流派」として分類することはない。

- ① N. Barnard, *The Origins of Bronze Casting in Ancient China*, N. Barnard & Sato Tamou, *Metallurgical Remains of Ancient China*, 日忠社、東京、一九七五年
- ② 第一章注①前掲文献、九二頁
- ③ 第一章注⑤前掲文献、二二三—二四頁では、低めのもの、高めのものと分類している。
- ④ 林巴奈夫「殷周青銅器に現れる龍について 附論——殷周銅器における動物表現型式二三について——」(『東方学報』京都、第二三冊、一九五三年) 一八八—一九二頁
- ⑤ 第一章注⑧前掲文献、八二頁
- ⑥ レールは細線饗養紋を太線饗養紋の細密化した紋様として捉えてい

三 各器種の器形変遷と流派

本章では、殷墟前半期の青銅器の発達の過程を明らかにすることを目的とする。前章の紋様の分析を手がかりに、例数の多い罍・爵・觚・尊・甗・鼎をとりあげて、器形の変遷を検討して型式分類を行ない、それらの各型式の併行関係を考察することによって分期を試みる。さらにそれをもとに各時期の流派の様相を明らかにしたい。まず、罍の型式変遷について検討して、両流派の饗養紋の併行関係を考察した後、他の器種について検討する。

。林巴奈夫や陳公柔・張長寿は太線饗養紋とは別系統の紋様として捉えており、私もこの意見に賛成である。

- ⑦ 容庚『商周彝器通考』(上) 燕京学报專号之一七、哈仏燕京学社、北京、一九四一年、一一八頁
- ⑧ 第一章注⑧前掲文献、一九〇—一九二頁
- ⑨ 饗養紋には、他に顔面のみを表わした饗養紋が二里岡期以来みられる。この紋様もまた、独自のデザイン、形状を伝統的に受け継いでいるようであり、殷墟前半期には尊や平面形が方形の罍や壺・方彝等、かなり特殊な型式に飾られることが特徴的である。この紋様を飾る青銅器群も流派として捉えうるかも知れない。

(1) 罍 (図3)

大まかな傾向としては、頸部と腹部の区別が徐々になくなり、腹部下端径が上端の径に近くなってゆくので、器身の形態の変化に基づいて、以下分類する。

B型4類1式 腹部下端径が上端径よりかなり大きい。頸部と腹部肩の径の違いも大きくて、両者は大きな段差によって区別される。

B型4類2式 腹部は上端径と下端径がほぼ等しく、中央径が最も大きい。頸部と腹部肩の径の差が小さくなって、段差も弱くなる。頸部が短縮される。

B型4類3式 腹部の張りが弱くなり、頸部と腹部の段差がますますなくなって無紋区画帯で区別される。

B型5類1式 腹部下端径が上端径より大きく、頸部と腹部は径が違い、著しい段差がある。

B型5類2式 頸部・腹部の段差が弱くなる。

B型5類3式 腹部は、下端径が大きい張りが弱く、頸部と腹部の段差はほとんど消滅して、無紋区画帯で区別されるのみである。

さて、罍の三足の形態はこの時期に大きく変化するために、編年の上で重要な要素と考えられてきた。李濟は殷墟期の罍の足の形態を

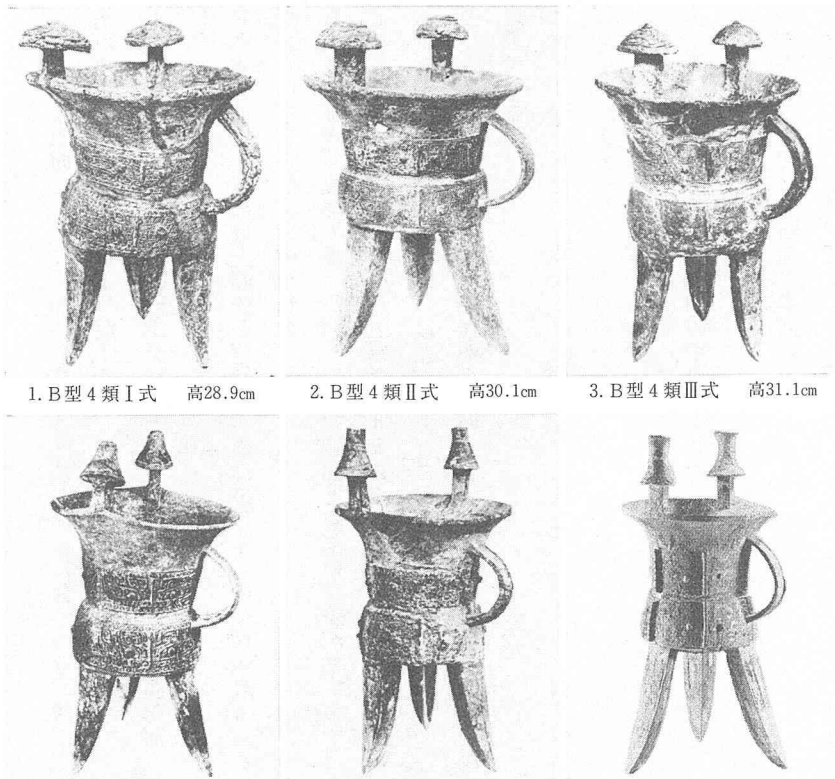
① 断面三角形の透底空足

② 断面三角形で内側の二面の中央に溝状の凹みがある不透底実足

③ 断面T字形の実足

④ 中心の途切れた断面T字形の実足

に分類し、この順序で変化したと考えた^②。しかし、華覚明らは、婦好墓出土の罍を検討し、②の型式は③より美観を呈す



1. B型4類Ⅰ式 高28.9cm

2. B型4類Ⅱ式 高30.1cm

3. B型4類Ⅲ式 高31.1cm

4. B型5類Ⅰ式 高34.0cm

5. B型5類Ⅱ式 高27.8cm

6. B型5類Ⅲ式 高44.7cm

図3 罍の型式分類

(1. 小屯YM333：R2044, 2. 小屯YM232：R2038, 3. 小屯YM188：R2037, 4. 小屯YM333：R2045, 5. 小屯YM388：R2047, 6. 安陽)

*印は細線派を示す。以下同じ。

表1 罍の諸要素の併行関係

B型4類				B型5類					
型式	饕餮紋		三足	柱帽	型式	饕餮紋		三足	柱帽
	形状	後方鳥				形状	後方鳥		
I	細線1類		①	丸み帯びる	I	太線1類		①	頂部突出せず
II	細線2類	○	①, ③	平たく突出	II	太線2類	○	③	円筒状突出
II	細線3類(古)	○	③	丸み帯びる					
II	輪郭	○	③	丸, 多条凹紋					
III	細線3類(新)	○	③	丸, 多条凹線	III	太線3類	○	②	高, 尖葉紋
III	細線3類(新)	○	中実①	上面直線的					

るように、足内方の溝の中に型持を設けて、足内范を固定する非常に高度な技術を用いて作られていると指摘した。^③ ゆえに①↓③↓②↓④の順に三足の形態が出現したと考えてよい。この順序は、概ね器身の形態の変化に即している。ただし、殷墟出土の青銅器中、Ⅲ式にあたるYM一八八出土R二〇三六罍の足は、断面三角形であるが、空足ではなく、中実である。また、コレクション資料中にも、Ⅲ式に相当するが、断面三角形の空足を持つものがある。②の足の内側の二面につけられた溝は、③の溝を模したルジメントであろうが、③から②へ移行する間に、見掛け上あまり安定感のよくない③の断面T字形足を嫌って、復古調の断面三角形足が作られたのではないだろうか。

また、柱帽も次のように変化する。B型4類の柱帽は、二里岡期B型3類新段階の形態を受け継ぎ、上面がまるくて頂上部がわずかに突出するもの、上面の斜面はまるいが頂上の突出部が平たくて径が大きいもの、上面斜面が直線的な円錐形のもの、頂上突出部が小さくて上面斜面がまるく凹紋の葎手が長くて多条にみえるもの、等の種類がある。一方、B型5類は、二里岡期B型3類新段階のもう一つのタイプにみられた、斜面が内湾する型式の柱帽が丈高になったもの、頂上突出部が円筒状を呈し大きく突出するもの、より丈高な柱帽となり、斜面に尖葉紋と組合わせ渦紋帯とを飾り、頂上面に凹紋を飾るものがある。B型4類の変化は一方的な変化ではないので把握し難いが、B型5類の柱帽は、まず頂上突出部が誇張され、さらに、紋様帯でその形状を表現するものへと変化し、全体には丈高になってゆくと考えてよいだろう。

各要素の変化を表1にまとめた。饗餼紋の形状と、器身の形状、三足の形態や柱帽の形態の変化の方向性は、一部例外があるがほぼ矛盾しない。次に、B型4類とB型5類の各型式の併行関係を器形の共通性などから考察すると、(1) B型5類Ⅱ式とB型4類Ⅱ式の紋様が極めて類似している。(2) 腹部と頸部の境の段差が消滅してゆく状況は、B型4類Ⅰ式とB型5類Ⅰ式、B型4類Ⅱ式とB型5類Ⅱ式、B型4類Ⅲ式とB型5類Ⅲ式がそれぞれ似通っている。(3) B型4類Ⅱ式のうち柱帽の頂上突出部が平たい型式とB型5類Ⅱ式の、柱帽の突出部の形態が類似する。(4) B型4類Ⅰ式とB型5類Ⅰ式は断面三角形の空足を持ち、B型4類Ⅱ式のほとんどとB型5類Ⅱ式がT字形断面の三足を持つ。これらの点から、

B型4類Ⅰ式とB型5類Ⅰ式、B型4類Ⅱ式とB型5類Ⅱ式、B型4類Ⅲ式とB型5類Ⅲ式がそれぞれ併行すると考えられる。

以上の考察より、二つの流派の紋様の併行関係を整理してみよう。まず、各紋様の形状と器形によって分類した各型式の対応関係は、以下のとおりである。B型4類Ⅰ式Ⅱ細線1類、B型4類Ⅱ式Ⅱ細線2類・3類、B型4類Ⅲ式Ⅱ細線3類、B型5類Ⅰ式Ⅱ太線1類、B型5類Ⅱ式Ⅱ太線2類、B型5類Ⅲ式Ⅱ太線3類。細線3類饗餮紋はB型4類Ⅱ式とⅢ式にわたって用いられている。ただし、B型5類Ⅱ式と併行するB型4類Ⅱ式に飾られた細線饗餮紋3類は羽根の数がやや少ないのに対して、B型5類Ⅲ式と併行するB型4類Ⅲ式罍の細線3類饗餮紋は、羽根を飾る部位が増し、非常に細密化した形状を呈するので、それぞれを古段階、新段階とする。よって、細線1類饗餮紋と太線1類饗餮紋、細線2類饗餮紋・細線3類饗餮紋の古段階と太線2類饗餮紋、細線3類饗餮紋新段階と太線3類饗餮紋がほぼ併行すると考えられる。なお、輪郭饗餮紋を飾るものはB型4類Ⅲ式にあたる。

ところで、B型5類Ⅱ式は、鋳型の合わせ目にあたる部分に二列の低い稜脊を持つ。B型5類Ⅲ式は鋳型の合わせ目および饗餮紋の中心に六列の稜脊を持ち、口縁下に尖葉紋を飾る。現在、例数は少ないが、これに続く型式(B型5類Ⅳ式)やB型5類Ⅲ式にあたるコレクション資料も皆、稜脊・尖葉紋を持つ。よって太線饗餮紋を飾る「流派」は、B型5類に限ってみられ、太線2類饗餮紋を飾る段階より、稜脊や尖葉紋を共に飾ることが一般的であったといえる。一方、細線饗餮紋を飾る「流派」は、主にB型4類罍にみられ、尖葉紋や稜脊を共に飾るものはほとんどない。なお、全体に丸い器身をもつ罍(D型と称する)は、細線3類(新)・太線3類を飾るものがある。

(2) 爵(図4)

主に二里岡期のB型を受け継いだ平底の爵と、新しく出現した円底爵(D型)の二種が盛行する。^④

B型は、円錐形柱帽をもつ型式（1類）と、截頭円錐形柱帽をもつ型式（2類）とがある。D型には、三条の弦紋を飾るものと、饕餮紋帯を飾るものがあるが、饕餮紋を飾るものを中心に論を進めたい。まず、器形に重点をおいて型式分類を行ない、同時に各型式に飾られる紋様を検討する。

B型1類1式 頸部と腹部の径の差が小さいが、段差が残る。頸部・腹部共に、同幅の細線2類饕餮紋帯を飾り、口縁下に尖葉紋を飾る。

B型1類2式 頸部が縮小して紋様帯も狭くなったため、組み合わせ渦紋帯を飾る型式。腹部には細線3類（新）饕餮紋を飾り、口縁下尖葉紋と稜脊を持つ。

B型2類1式 殷墟出土器にはこの型式に該当するものはないが、岐山京当出土爵は太線1類饕餮紋を腹部に飾るので、二里岡期B型の最終型式より新しいと考え、1式とする。頸部径と腹部径は、大きく異なる。単柱で、丈高の柱帽は截頭円錐形に近い。

B型2類2式 頸部と腹部の径の差が小さいが、段差がある。頸部と腹部に同幅の輪郭饕餮紋帯を持つ。柱帽は、無紋らしいが、丈高で上部がふくらむ。

B型2類3式 頸部が短縮され、罔両紋帯や組み合わせ渦紋帯等の幅の狭い紋様が飾られる。口縁下に、尖葉紋を飾り、稜脊を飾らない例・稜脊を腹部のみに飾る例・口縁下・頸部・腹部共に稜脊を飾る例がある。柱帽は上部径が大きく、突線・尖葉紋・組み合わせ渦紋帯で飾られる。

D型1式 平底から円底への過渡的な型式で、平底に近いもの、底がやや突出したもの等があり、形態は一定していない。柱帽はいずれも円錐形であるが、上面は無紋のものもあり、円圈紋・罔紋等が飾られるものもある。三足の断面形は内方二面がやや内湾する。細線1類饕餮紋を飾るもの、太線1類饕餮紋帯を飾るものがある。

D型2式 円底の形態が確立した型式で、三足の断面形は内方二面が内湾する。細線1類饕餮紋帯を飾るものがある。

D型Ⅲ式 まるみのある短胴を持つ。三足が反り、柱帽が平たくて尾の短い古段階、器身から足先端までが直線的で柱帽が高く、尾がやや長くなった新段階がある。細線3類(新)饜蓋紋を飾る例は、新段階にあたるものの紋様の方がやや細密化している。いずれも、口縁下尖葉紋を飾る例はない。太線3類饜蓋紋を飾るものは、いずれも、口縁下尖葉紋を持ち、腹部に稜脊を飾るものと飾らないものがある。三条の弦紋を飾る例もある。

殷墟前半期のB型・D型に共通する器形変化の傾向として、当初流折部に接していた柱が後方へと離れてゆくという指摘があるが、この変化は鑄型構造の変化によって説明できる。双柱の爵の場合、二里岡期には、流と器身の部分の内范が一体であり、流折部にあたる境の部分に柱脚を彫りこんでいたのに対し、殷墟期に入って流と器身の内范が分離して、柱脚が器身の内范に彫りこまれるようになったため、柱脚は徐々に境目から遠ざかるように後退したと考えられる。B型2類Ⅰ式とD型Ⅰ式・Ⅱ式では、柱脚の断面形が三角形で、その内方の稜が流折の延長上につながるが、その他の新しい型式では、柱脚の断面形が扁平な半円形で、柱脚の前端が流折に接するようになっている。

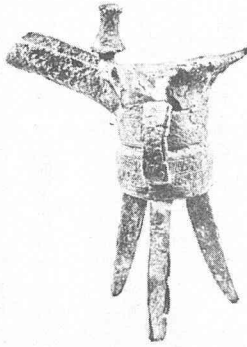
さらに、流の断面形に注目すると、下面・内面の最下端がV字形に鋭く屈曲するものから、U字形にまるく屈曲するものへと変化する。V字形に屈曲するものは、B型2類Ⅰ式・D型Ⅰ式・Ⅱ式で、これらは器壁の厚さが1~2mmと非常に薄いのに対して、U字形にまるく屈曲するその他の型式は、口縁外面に端面をもち、器壁が六~八mmと厚くなっている。

次に、三足部分の鑄型構造を検討してみよう。二里岡期には三足の部分は器身外范と分離したY字形に交わる三塊の外范を用いて鑄造していた。しかし、B型2類Ⅰ式とD型Ⅰ式のR二〇三二以外は、足の外面中央范線がみられず、底部にも范線はみられない。よって、三足部分の外范は、底部全体を覆う形の底范と、三足外面をそれぞれ覆う三塊の外范との合計四塊から成っていたと考えられる^⑥。

このように、鑄型構造の変化や紋様の変化をふまえて各型式の併行関係を考察すると、最も古い段階として、B型2類Ⅰ式とD型Ⅰ式の一部が併行する可能性がある。D型Ⅰ式とD型Ⅱ式が次に古い段階であり、柱脚の流折に接する型式の



1. B型2類Ⅰ式 高21.9cm



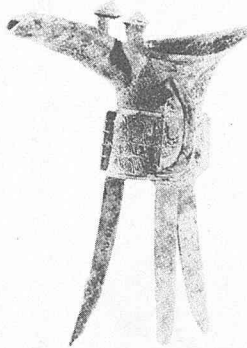
2. B型2類Ⅱ式 高19.6cm



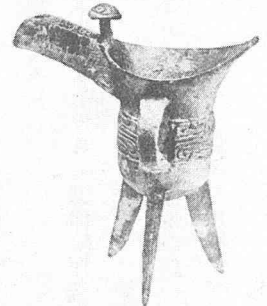
3. B型2類Ⅲ式 高20.7cm



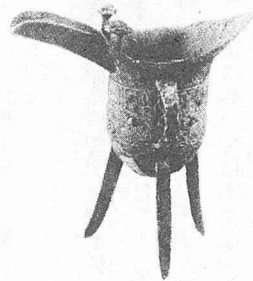
4. B型1類Ⅰ式* 身高10.2cm



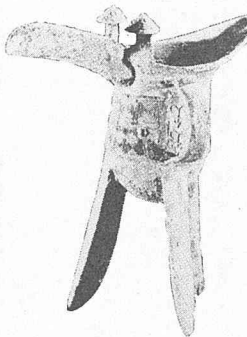
5. B型1類Ⅱ式* 高23.2cm



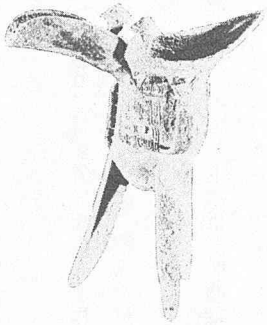
6. D型Ⅰ式 高13.8cm



7. D型Ⅲ式(古)* 高15.3cm



8. D型Ⅲ式(新)* 高19.0cm



9. D型Ⅲ式(新) 高18.5cm

図4 爵の型式分類

(1. 陝西岐山京当, 2. 小屯YM232: R2021, 3. 侯家庄HPKM1022: R1051, 4. 小屯YM238: R2023, 5. 婦好墓AXTM5: 674, 6. 小屯YM329: R2032, 7. 武官村大墓W1, 8. 大司空SM539: 24, 9. 高樓庄M8: 13)

B型1類1式とB型2類Ⅱ式が次の段階である。細線3類饜齋紋を飾るD型Ⅲ式(古)はこれらより若干新しいと考える。最新段階としてB型1類Ⅱ式・B型2類Ⅲ式・D型Ⅲ式(新)が併行すると考える。

流派と紋様や装飾の間には相関関係が認められる。すなわち、B型では、細線饜齋紋派は円錐形柱帽を持つ1類に限って用いられるのに対して、太線饜齋紋派は截頭円錐形柱帽を持つ2類に限られるようである。D型はすべて円錐形柱帽を持つので、流派と柱帽との関係に言及することはできないが、Ⅲ式においては、細線饜齋紋派は口縁下尖葉紋を共に飾らないのに対し、太線饜齋紋派は尖葉紋や稜脊を共に飾るという区別がある。反面、B型においては尖葉紋・稜脊をいずれの流派も共に飾っており、D型のような区別はみられない。しかしB型・D型に共通して、細線饜齋紋を飾る流派と太線饜齋紋を飾る流派との間には、紋様帯構成や装飾の区別があったといえる。

(3) 觚(図5)

觚は、腹部が細く、口縁や脚部の径が大きくなって全体の縊れが大きくなってゆくといわれている^⑦。太短い型式と細長い型式とがあるともいわれているが、R二〇一三・R二〇一七・R一〇三六等が若干太短く、R二〇〇八・R二〇〇九が著しく細長い以外は、形態にあまり大きな差はない。脚部の紋様帯が上下に拡張してゆく様相や、圈線帯が狭くなり直立する過程にも注意しつつ、変化過程を整理してみたい。

I式 二里岡期最終段階と同様、脚部圈線帯が斜傾する。脚部紋様帯は狭く、この部分には饜齋紋を飾らずに鳥紋や雷紋を飾る。細線饜齋紋帯を持つ例は、殷墟では発見されていないが、藁城台西村CⅡ一〇例のように、細線1類饜齋紋を飾る例もあるようである。太線饜齋紋を飾る例では、腹部紋様帯が狭いためか二里岡期b1類・b2類に似た単純な形の饜齋紋を飾っていて、一見古い型式にみえる。しかし、脚部の鳥紋の嘴前方につけられた羽根の形状は、殷墟期の太線1類饜齋紋の特徴を持つので、殷墟の太線1類饜齋紋に併行するものと思われる。R一〇三六の脚部型持が三個である以外は、



図5 觚の型式分類

- (1. 小屯YM388 : R2017, 2. 小屯YM331 : R2013, 3. 小屯YM238 : R2008, 4. 侯家庄HPKM1550 : R1037, 5. 侯家庄HPKM1400 : R1034, 6. 小屯M18 : 8, 7. 小屯YM232 : R2005, 8. 小屯M18.4 : R2000, 9. 侯家庄HPKM1400 : R1032)

型持が二個、鑄型の合せ目に設けられている。
 II式 脚部圏線帯が垂直に近く、脚部紋様帯が広くなって、長鼻の獣紋を飾る。殷墟出土例でこの型式にあたるものはわずかに二例のみであるが、R二〇〇五は細線3類饗餮紋を飾り、R二〇一三は太線2類饗餮紋を飾る。¹⁰⁾ また、R二〇〇五は脚部型持が二個であるが、R二〇一三は型持が三個ある。
 III式 脚部圏線帯が狭く、これに対応して脚部紋様帯が広くなる。広くなった部分を埋めるため、組み合わせ渦紋帯を脚部

紋様帯上下に飾っている。また、脚部端の垂直な立ち上がり部が確立する。輪郭饜餿紋と口縁下尖葉紋を飾る R二〇〇八・R二〇〇九がこれにあたる。

Ⅳ式 脚部紋様帯がますます広くなり、脚部圏線帯がほぼ垂直である。脚部の主紋帯の幅を広げ、組合わせ渦紋帯はその上部のみに飾る。細線 3 類(新)饜餿紋を飾るものは尖葉紋や稜脊を飾らないが、輪郭饜餿紋を飾るものは尖葉紋と稜脊を飾る。

Ⅴ式 脚部圏線帯が細く、腹部や頸部との間に段差が設けられ、区別が強調される型式。非常に細密化した細線饜餿紋を飾るものと、腹部に倒立した龍、腹部に透し彫りや輪郭表現の顧首龍を飾るものがある。婦好墓例では、いずれも稜脊と尖葉紋を共に飾る。^①

このように、觚にも、流派二種が併存するが、Ⅲ式以降は大線派は輪郭顧首龍を飾るのが一般的なようである。Ⅳ式においては、細線饜餿紋派は尖葉紋や稜脊を飾らないという約束があるようだが、Ⅴ式にあたる婦好墓出土例では、この約束はくずれてしまう。

(4) 尊(図7-1-4)

截頭有肩尊 A 型と頸部の長い B 型が二里岡期から引続いて存在する。^② 該期の尊の特徴は、すべてが大線饜餿紋を飾ることである。尊の紋様(図6)は、罍の紋様に比べると画面が大きいためか、全般的に複雑な形状を呈する。しかし、饜餿紋の角や胴体内部に表わされた線の複雑さ・羽根の形状等を比べてみると、R二〇五九・R二〇五六・R二〇五八の饜餿紋は罍の大線 1 類饜餿紋に近く、R二〇六一の饜餿紋は、罍の大線 2 類饜餿紋に近いと判断した。^③ 腹部が底部に向かって、まるみをもって収束してゆくものから、腹部側縁が直線的で傾斜の少ないものへと変化すること、脚部が高くなってゆくことが既に明らかにされている。このような変化は、紋様帯の変化に如実に現れている。すなわち、腹部が垂直に近くな

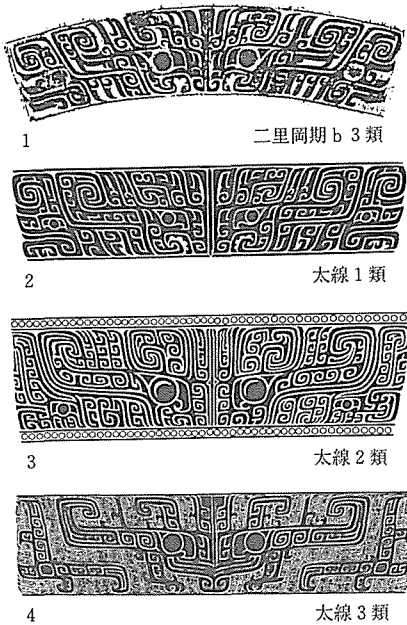


図6 尊の太線饕餮紋

- (1. 鄭州白家莊M3, 2小屯YM333 : R2059, 3. 小屯YM388 : R2061, 4. 小屯YM331 : R2070)

ると、紋様帯も歪みが少なくなるために幅広く拡張されるようで、腹部の主紋帯が拡張されるばかりでなく補足的な紋様帯も付加される。また、脚部にも紋様帯が加えられる。よって、紋様帯の増加に主眼をおいて型式分類を行ない、紋様帯の特徴を列挙する。

A型Ⅰ式 肩部と腹部の二帯の紋様帯しかない。型持は十字形で、鑄型の中央、すなわち饕餮紋の正面にあたる部分につく。R二〇五九は二里岡期A型Ⅱ式と紋様・器形が大変よく似ている^④。底部は、ほぼ平らである。

A型Ⅱ式 脚部に紋様帯が出現する。また、腹部紋様帯上に、雲雷紋帯を飾る例がある。頸部と肩部の屈曲がやや明確になつて、頸部が垂直に近く立ち上がる。底部はわずかに突出し、口縁端面が幅広く、器厚が厚くなる。型持は長方形に変化し、鑄型合わせ目に設けられる。太線Ⅰ類饕餮紋を飾る。

A型Ⅲ式 頸部が短くなる。太線Ⅱ類饕餮紋を飾る。この型式に属するR二〇六一は、肩部に立体的に犧首を鑄出して

いる。
B型Ⅰ式 肩部・腹部に二帯、脚部に一帯の紋様帯を持ち、腹部に太線Ⅱ類饕餮紋を飾る。おそらく別鑄された犧首を鑄型の合わせ目につけたR二〇七一がこの型式に相当する。型持は十字形で、鑄型合わせ目に設けられている。底部はわずかに突出するようである。厚い稜脊を持つ。

B型Ⅱ式 紋様帯構成はⅠ式と同様であるが、腹部に太線Ⅲ類饕餮紋を飾る。口縁下に尖葉紋を飾らないR二〇七〇は犧首の内面が凹んでおり、内

范が外范に合わせて作られたことがわかるので、同時鑄と考えられるが、尖葉紋を飾る型式の小屯北M一八〇四の犧首は別鑄法によってつけられたようで、脚高も高く、脚にも稜脊をつけるなど、新しい特徴を持つことからR二〇七〇より新しい段階のものと考ええる。また、型持は方形であるが、うち二孔のみが内外に貫通するのが通有のようである。まず、相互に固定した外范二塊と他の外范一塊との境に型持を設けることによって、内范を固定するという技法が開発されたのではないだろうか。

以上の各型式の併行関係を整理してみると、大線Ⅰ類饗養紋を飾るA型Ⅰ式とⅡ式は最も古い段階のものである。B型



1. 尊A型Ⅱ式 高24.0cm



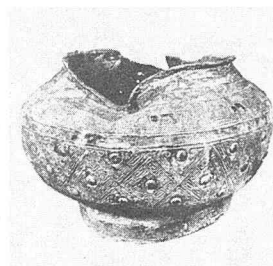
2. 尊A型Ⅲ式 高24.4cm



3. 尊B型Ⅰ式 高47.5cm



4. 尊B型Ⅱ式 高34.1cm



5. 甌Ⅰ式 高17.4cm



6. 甌Ⅱ式 高21.0cm

図7 尊・甌の型式分類

- (1. 小屯Y M331 : R2058, 2. 小屯Y M388 : R2061,
3. 小屯Y M331 : R2071, 4. 小屯Y M331 : R2070,
5. 小屯Y M388 : R2062, 6. 小屯Y M232 : R2067)

Ⅰ式は、太線2類饗餞紋を飾る点から、A型Ⅲ式とほぼ併行すると考える。但し、型持が十字形である点や紋様帯構成がA型Ⅱ式と同じである点は、古い特徴を残しているので、A型Ⅲ式より若干古い可能性がある。そして、B型Ⅲ式が最も新しい段階のものである。

(5) 甌 (図7-5・6)

甌は、短い頸部に圈線帯をもつ点や器の全体の形が尊A型と大変よく似ていて、尊A型を祖型として成立した器種であると考えられる。よって、尊A型同様に肩部の屈曲が鋭い型式が古く、屈曲がまるい型式ほど新しい^⑮。該期の甌の例はわずかで、腹部に饗餞紋を飾るものと雲雷乳釘紋や鈎連雷紋を飾る例がある。肩部の屈曲が明瞭なものをⅠ式、屈曲が不明瞭でまるいものをⅡ式とすると、Ⅰ式にあたるR二〇六二は雲雷乳釘紋を腹部に飾り、R二〇六一尊と紋様が酷似しているから、尊A型Ⅲ式とほぼ併行すると考える。Ⅱ式には、太線3類饗餞紋を飾る例と細線3類饗餞紋を飾る例があるが、いずれにも尖葉紋や稜脊はみられず、流派による差異は特にない。これらは、尊B型Ⅱ式と併行する紋様であり、それはまさしく尊A型が途絶える時期にあたる。甌は尊A型が消滅する時期に現れるという事実は、尊A型の後裔型式であるという見解の傍証ともなる。

(6) 鼎

鼎は数種類の円鼎と方鼎に分けられる。郭宝鈞は二里岡期の鼎と殷墟期の鼎の違いは、三足と兩耳の位置関係の違いにあると指摘した^⑯。郭とリニエルトや諸研究者の編年案に従い、罐形器身と水平口縁を持つA型を次のように分類する。

Ⅰ式 円錐形空足を持ち、一耳が一足の上につく。耳脚が口縁の外側に偏ってつくが、二里岡期の鼎と異なる点は口縁外方に段を設けない点である。

Ⅱ式 円錐形の空足ないしは実足を持ち、両耳が一足をはさむ位置につく。耳脚の幅が口縁幅と同じである。

Ⅲ式 下細りの細い円柱状の足を持ち、細い両耳を持つ。足が底部につけられるので、腹部と足の境は一直線にならない。口縁の厚さは未だ薄い。他に、殷墟前半期の鼎の出土例としては、板状の三足を持つB型、頸部が縊れ斜傾する口縁を持つE型、口縁が斜傾し深い腹部を持つF型、鬲状の分楯足を持つ鬲鼎G型があるが、その出土数はそれぞれ非常に少ない。林巳奈夫は、特にA型を器形上の特徴からさらに数種類の「型」に分類している。紋様帯や飾る紋様の種類には、若干の約束が認められ、例えば林のいう四型は、腹部全面に饜餮紋を飾る、殷墟後半期にまで継続するものである。流派に着目してみると、細線饜餮紋やそれと同様の技法による紋様を飾るものは全く見られないことが最大の特徴である。また、右記の腹部全面に饜餮の顔を飾るもの等、一部の円鼎と大型の円鼎や方鼎を除けば、饜餮紋を飾るものは大変少ないことも特徴的である。このような紋様に関する特徴は、当時の社会においては鼎の機能が饜餮紋の持つ象徴的な意味を必要としていなかったことを示しているのではないだろうか。なお、多くの鼎に飾られる幾何学紋や動物紋等は、太線饜餮紋と同様の特徴を持っているから、太線饜餮紋と互換的に用いられた可能性がある。

(7) 各器種の併行関係と分期

前項までに殷墟前半期の各器種の変遷の様相が明らかになったので、ここでは各型式の併行関係について考察し、青銅器全体の分期を試み、また、土器編年との併行関係についても考察することによって、殷墟前半期の時間をはかる物差を作ってみたい。

紋様については、罍の編年をもとに、

細線1類饜餮紋Ⅱ太線1類饜餮紋（および同様の特徴を持つ紋様）

細線2類・3類（古）饜餮紋Ⅱ太線2類饜餮紋

細線3類(新)饜餮紋Ⅱ太線3類饜餮紋

というおおよその併行関係が想定できた。まずこの併行関係を軸に各型式の併行関係を考察しよう。

第一に、太線1類饜餮紋および細線1類饜餮紋を飾る型式には、爵B型2類Ⅰ式・D型Ⅰ式・D型Ⅱ式、罍B型4類Ⅰ式・B型5類Ⅰ式、觚Ⅰ式、尊A型Ⅰ式・A型Ⅱ式がある。爵D型や尊A型は、その中に新旧型式が存在し、その古段階にあたるものはいずれも二里岡期最終段階のものと近い特徴を持っている。觚にも、二里岡期のものに近い特徴を持つものと新しい特徴を持つものがある。明確に分類することはできなかったが、資料数が増加すれば、さらに時期を細分できるかもしれない。

次に、太線2類饜餮紋または細線2類・3類(卍)饜餮紋を飾る型式には、爵B型1類Ⅰ式、罍B型4類Ⅱ式・B型5類Ⅱ式、觚Ⅱ式、尊A型Ⅲ式・B型Ⅰ式、甗Ⅰ式がある。爵B型2類Ⅱ式は、他の饜餮紋との併行関係の判断しにくい輪郭饜餮紋を飾るが、前項で述べたとおり、器身形態の特徴から爵B型1類Ⅰ式と併行するので、これらの型式と併行すると考えられる。

太線3類または細線3類(新)饜餮紋を飾る型式は爵B型1類Ⅱ式・B型2類Ⅲ式・D型Ⅲ式、罍B型4類Ⅲ式・B型5類Ⅲ式、鼎Ⅲ式、觚Ⅳ式・V式、尊B型Ⅱ式、甗Ⅱ式や罍、卣等があげられる。ただし、爵D型Ⅲ式には新旧型式がみられ、觚も新旧の二型式がある。また爵B型1類Ⅱ式・2類Ⅲ式も紋様の特徴からみて、この新型式と併行すると考えられる。そして、婦好墓の出土例によって検討してみると、それらの新型式はいずれもレベル分類でいう第V段階の紋様を飾る型式のものと器形上の特徴が良く似ているので、むしろ後の時期に併行するものと考え、これらの型式を除外しておきたい。さて、この第三番目の時期には、組合わせ渦紋帯・稜脊・尖葉紋が多くの器種のいくつかの型式で普遍的に用いられるようになる。觚Ⅲ式は、組合わせ渦紋帯や尖葉紋といった、新しい要素を持つが、Ⅳ式と併行する段階のものほど定型化した特徴を持っていないので、前段階との中間に位置付けられると考える。

このように、殷墟前半期の青銅器は、およそ、三つの時期に分けることができる。しかし、その第二番目の段階の青銅器は、各器種各型式共に、例数が非常に少なく、また、紋様自体も、第一番目の段階のものと同様の変化があるわけでもないで、ここではあえて一つの時期を設定せず、第一番目と第二番目の段階とを合わせて殷墟銅一期と称し、それぞれを古段階・新段階と称することにする。そして、第三番目の段階を殷墟銅二期と称する(図8)。

さて、このようにして得た分期案の中で流派の様相をまとめてみよう。罍・爵・觚等には、殷墟銅一期より細線派・太線派の両流派がみられ、爵B型や罍B型では柱帽の形の違いと両派の違いとに対応関係があると考えられた。しかし他の器種ではこのように顕著な対応関係はみられない。ところで銅一期新段階からみられた尖葉紋と二里岡期の尊B型に既に見られた稜脊は、銅二期に入ってから大多数の器種において普遍的にみられるようになるが、注目すべきことに、太線饕餮紋または太線派に属する輪郭饕餮紋を飾るものは、一部の例外を除いて尖葉紋と稜脊を共に飾っている。反対に細線饕餮紋を飾るものはこれらの裝飾をつけないことが多い。この事実は、カールグレンの紋様の組合わせの概念、あるいは林の「流派」の概念と一致するものであり、流派の性格を考える上でも非常に重要である。

次に土器編年との併行関係を考察し、青銅器によって分期した各期をどのような時代的背景の中で捉えうるか見当をつけておきたい。

殷墟の土器編年は、一九六一年、一九六四年に、大司空村における層位資料に基づき四つの時期に分期する編年案が発表され、専ら流布している。²⁰ 大司空一期は一九六一年の発表で下層の資料とされたものであり、大司空二期は、一九六二年の出土資料をもとに設定されたもので、一期より後の段階であると発表されている。しかし、それらの土器の図を比較してみると、一期と二期の区別は明確とはいえない。一方、殷墟出土の土器は、解放の前後を通して出土した資料全体をみても二里岡期の最終段階の土器との間に型式差がある。鄒衡は、殷墟期の土器を七組四期に分期する編年案を発表すると共に、二里岡期から殷墟期への文化の連続性についても論じており、その論文中で、両時期の型式の隔たりを埋める資

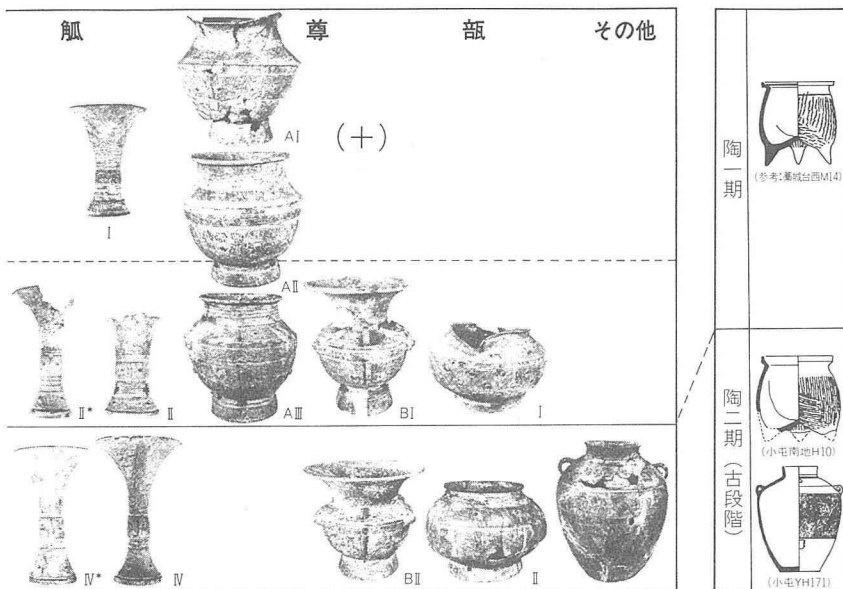
料として、刑台曹演庄下層の資料をあげている。また、鄒衡の編年案では、殷墟第一期に小屯出土の土器をあて、殷墟第二期に大司空一期・二期の土器を含めていようである。²¹ 殷墟前半期の土器資料に関しては、大司空村の層位資料に依拠した編年案よりも鄒衡の型式学的な操作による編年案の方が明解である。私は、青銅器と同様、鄭州市内では出土しない段階以降を「殷墟期」と仮に称し、鄒衡の提唱する刑台曹演庄下層に併行する型式の土器を「殷墟陶一期」、大司空一期と二期の土器を合わせて「殷墟陶二期」と分期することにする。ただし、殷墟陶二期（ほとんどが大司空二期として発表されるもの）の資料には、新旧の差が漠然とながら存在するようなので、仮に古段階、新段階と称する。

さて、殷墟期には、鬲・簋・盤・爵・觚・罍・壺・卣・觚形尊・甗等の器種が青銅器・土器共にみられる。しかし、青銅器は、二里岡後半期以来、土器とは離れて独自に発達を遂げつつあり、相互に影響関係のみられる器種は非常に少ない。殷墟前半期に限ってみると、陶二期に出現する陶壘の器形や紋様帯の区切り方が銅二期の壘とよく似ているので同時期かと考えられ、また、陶二期と考えられる陶甗の器形は、銅二期の銅甗とよく似ているため、同時期と考えられるという程度で、併行関係を明確にすることはできない。そこで、共存関係を検討してみよう（表2）。

銅一期の銅器のみを副葬する三家庄M三は、土器の副葬はみられないが、陶一期の墓群の中の一墓であるという。よって、概ね銅一期は陶一期と併行するようである。²²

また、陶二期の古段階の土器を共伴するHPKM一〇〇一・小屯南H一三・五九武官M一では、銅二期までの青銅器が副葬されており、陶二期新段階の土器を共伴する殷墟五号墓（婦好墓）・小屯北M一八・小屯北M一七・侯家庄AWBM二五九・大司空SKM五三九・大司空SKM一五七等では、銅三期までの青銅器を副葬している。よって、銅二期は陶二期とほぼ併行し、銅三期は陶二期の後半期以降の時期と併行すると考える。

陶二期の土器は、甲骨一・二期（武丁前後／祖辛期）の甲骨と共伴しているので、²³ このことを媒介に銅器編年と対応させると、銅二期から銅三期にかけてが甲骨一・二期に相当することになる。婦好墓では銅二期から銅三期への過渡の様相を



の併行関係

(縮尺 高: 1/12, 壘1/36)

土器の共伴関係

YM232	爵B2Ⅱ, 罍B4Ⅱ*・B5', 鼎AⅠ, 觚Ⅰ, 尊AⅡ	爵DⅢ*, 甗Ⅱ*			② ⑧ ⑨ ⑩ ⑪
59武官M1	觚Ⅱ	爵DⅢ*, 罍DⅠ*, 鼎AⅢ, 觚Ⅳ*, 甗Ⅱ		二期(古)	⑭
武官大墓	觚Ⅱ	爵DⅢ*, 鼎AⅢ・GⅢ, 觚Ⅳ*・Ⅳ, 卣, 簋			⑮
HPKM1001		爵DⅢ*, 觚Ⅳ, 甗Ⅱ		二期	⑧ ⑨ ⑪
YM188		罍B4Ⅲ*, 爵DⅢ, 鼎GⅢ, 甗Ⅱ, 簋			② ⑧ ⑨ ⑩
YM184		爵DⅢ ⁻ , 觚Ⅳ			⑧ ⑪
YM238	爵B1Ⅰ*, 觚Ⅱ	爵DⅢ ⁻ , 觚Ⅳ, 方彝, 壘, 壺, 卣, 罍D			② ⑧ ⑨ ⑪
小屯北M18	鼎BⅡ	罍B4Ⅲ*, 鼎AⅢ・B, 觚Ⅳ(新), 壘, 尊BⅡ, 卣	爵B2Ⅱ, 罍D, 簋, 甗, 盤, 甗	二~三期	⑮
小屯北M17		鼎AⅢ	爵Ⅳ(新)*, 爵Ⅳ(新), 觚Ⅳ(新)*	二~三期	⑯

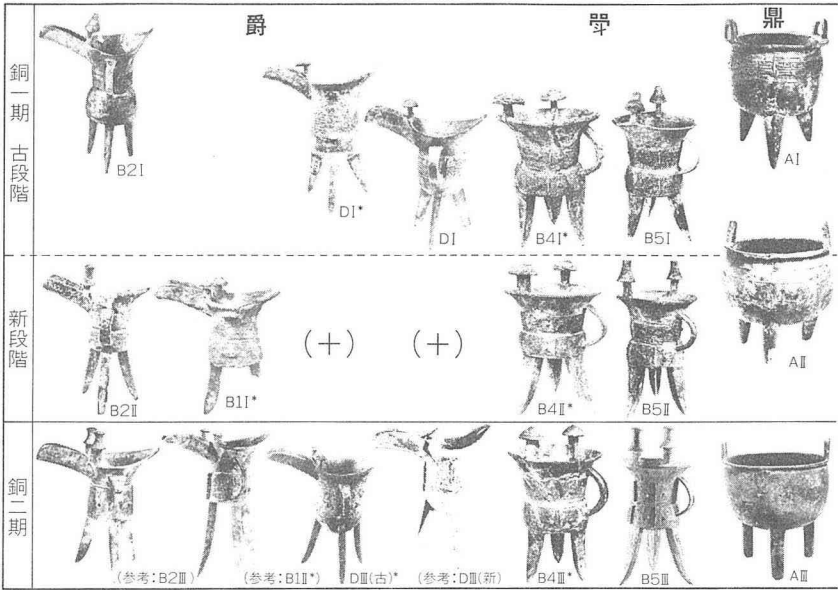


図8 各器種

表2 青銅彝器と

造 構	銅 器 分 期			土器	文献
	銅 一 期	銅 二 期	銅三期以降		
三家庄G1	罍B4I*, 甗・ 鼎A1II ⁻ ・A1I				⑫
三家庄M3	罍B4II*, 鼎A1II, 觚II?, 爵DII				⑬
YM333	爵C・DI, 罍B4I*・ B5II, 觚I, 鼎B(二 里岡期か), 尊A I, 鼎A II ⁻				② ⑧ ⑨ ⑩ ⑪
HPKM1488	爵D II*, 罍B4II, 觚I				② ⑧ ⑪
YM331	爵DI*, 罍B4II*, 觚I(二里岡期か), 觚II, 尊A II・BI	爵(方形), 罍B4III, 鼎F			② ⑧ ⑨ ⑩ ⑪
YM388	爵DI*, 罍B5I, 觚I・II ⁻ , 鼎A II ⁻ , 甗I, 尊A III	爵D III ⁻ , 罍B4III*, 卣 ⁻			② ⑧ ⑨ ⑩ ⑪
YM222	觚I	爵D II ⁻			⑧ ⑪

右肩記号*は細線鬚鬘紋, ?は流派不明, 一は獸紋帯のないもの

持つ青銅器が出土しているので、この甲骨分期との併行関係の想定には、矛盾はない。

殷墟では、銅一期の青銅器は、多数発見されているにもかかわらず、土器との共伴例は未だない。小屯宮殿区出土土器中には、殷墟陶一期のものである可能性のある土器も含まれているが、出土量等は不明であり、また、小屯宮殿区以外の地区では陶一期の土器はほとんど発見されていない。なお、先に挙げた三家庄遺跡は、殷墟の中でも小屯等の中心的な遺跡からは離れた位置にある。よって、殷墟陶一期には、殷墟は、まだ都として繁栄していなかった可能性がある。銅一期の青銅器群が、史実上のどの帝の時期にあたるものであるか、殷墟遷都以降に作られたものか遷都以後に作られたものなどの問題は、今後の資料の増加を待って検討したい。

- ① 第一章注⑤前掲文献、二一四頁
- ② 李濟「記小屯出土之青銅器」(上)、『中國考古學報』第三冊、一九四八年)三八—四〇頁
- ③ 華覚明・馮富根・王振江・白采金「婦好墓青銅器群鑄造技術的研究」(『考古學集刊』第一集、一九八一年)二五三—二六〇頁
- ④ 爵には平面形が方形を呈するものが存在するが、ここではとりあげなかった。
- ⑤ 第三章注②前掲文献、三九—四二頁。なお、殷墟期全般の爵に關しては、柱高が増す、流と器壁のなす角度が大きくなる等の指摘もあるが、殷墟前半期についてはこれらの傾向は顕著ではない。(第一章注⑤前掲文献・第一章注⑤前掲文献二二頁)
- ⑥ 陳芳妹「從考古資料論青銅爵風格發展的主要趨勢」(『故宮學術季刊』第四卷第四期、一九八七年)、六五頁
- ⑦ 第三章注②前掲文献(上)、一一—一二頁・第一章注④前掲文献、五三—五五頁・第一章注⑤前掲文献、二二三頁・第一章注⑥前掲文献、四九頁
- ⑧ 第一章注④前掲文献、五三—五五頁・第一章注⑤前掲文献、二二三頁・第三章注②前掲文献、五二—五四頁
- ⑨ 河北省文物研究所編『藁城台西商代遺址』、文物出版社、北京、一九八五年、一—八頁、図七六
- ⑩ 腹部の鬢鬃紋自体は、細線2類鬢鬃紋・太線2類鬢鬃紋のどちらとも判定し難いが、後述の尊A型Ⅲ式にあたるR二〇六一の肩部の紋様とR二〇一三の脚部の紋様が大変よく似ているので、太線2類鬢鬃紋と判断した。
- ⑪ 輪郭頭首龍を飾る型式は腹部に太線派の表現方法による龍紋を飾るので、太線派に含める。
- ⑫ 第一章注⑤前掲文献、二一六頁
- ⑬ 二里岡期b3類鬢鬃紋には、実は、殷墟太線1類鬢鬃紋のメルクマールとした定型化した羽根が飾られている。一方、罍の項でも見たように殷墟太線1類鬢鬃紋は、二里岡期b2類鬢鬃紋を祖型とする紋様であり、罍の紋様に比べて複雑な形状をとる二里岡期b3類鬢鬃紋は、尊の大画面を埋めるために開発された紋様であろう。二里岡期b3類

饗養紋は、殷墟出土のR二〇五九尊の紋様と大変よく似ており、文中でも述べたようにこの紋様を飾る鄭州白家庄C八M三尊はR二〇五九尊と器形等の特徴も極めて近い。この型式は鄭州市内においても殷墟においても一点ずつしか発見されていないから、C八M三尊が殷墟期のものであるか、R二〇五九尊が二里岡期からの伝世品であるか、この紋様が両時期にまたがって製作されていたのか、即断することはできない。この問題は、二里岡期と殷墟期の境をどのように決定するかという問題と深い関わりがある。私は、鄭州市内から発見される青銅器（明らかに殷墟期以降と考えられるものは除く）は、基本的に二里岡期に含めて考えたいので、R二〇五九尊は、二里岡期からの伝世品、もしくは殷墟期の最も古い段階のものであるということにしたい。

⑭ ただし、二里岡A型Ⅱ式にあたる白家庄C八M三出土尊は、型持が鑄型の合せ目に設けられている。「初現期の青銅彝器」では、二里岡期の尊の検討の際、型持が鑄型の中央に設けられるものが古く、鑄型の合わせ目に設けて、正面から見えないように配慮したものが新しい特徴であると考えた。

⑮ 第一章注⑤前掲文献、二二二頁
 ⑯ 郭宝鈞『商周銅器群綜合研究』、文物出版社、北京、一九八一年、

四 流派と工人群

ここでは、前章から視点を転じて、流派と他の要素の相関関係や鑄型の分析を通して、青銅器の紋様によって分類した流派の違いとは、青銅器生産の場におけるどのような事象を示しているのかを考えてみたい。

五一七頁

⑰ 第一章注⑦前掲文献 p. 29-52

⑱ 円錐形の三足をもつR二〇五四鼎の足内部は底面より1cm程中空であるが、その先には銅がつまっている。

⑲ 第一章注⑤前掲文献、二〇二頁・第一章注①前掲文献

⑳ 中国科学院考古研究所安陽工作队「一九五八—一九五九年殷墟発掘簡報」『考古』一九六一年第二期

中国科学院考古研究所安陽工作队「一九六二年安陽大司空村発掘簡報」『考古』一九六四年第八期

㉑ 第一章注④前掲文献、六二—六三頁・鄒衡「試論夏文化」『夏商周考古學論文集』、文物出版社、北京、一九八〇年

㉒ 第一章注⑥前掲文献

㉓ 中国科学院考古研究所安陽工作队「一九七三年安陽小屯南地発掘簡報」『考古』一九七五年第一期

㉔ 李濟・董作賓・石璋如・高去尋『小屯第三本 殷墟器物甲編 陶器上輯』中国考古報告集之二、台北、一九五六年

㉕ 中国社会科学院考古研究所安陽工作队「安陽殷墟三家庄東的発掘」『考古』一九八三年第二期

(1) 鑄型施紋法

第二章における検討によって、細線饜餿紋と太線饜餿紋のデザインは、各々二里岡期のa類とb類を祖形としていたことが判明した。ところが、二里岡期のa類・b類は、各々鑄型直接施紋と原型施紋という施紋法の違いに対応することもわかっている。それでは殷墟期の兩派の饜餿紋の表現も、鑄型施紋法に差異がみられるのであろうか。

李濟は『殷墟出土爵形青銅器之研究』において、紋様を製作方法によって六種類に分け、これをもとに紋様の分析を行っている^①。しかし、李の分類には基準が曖昧な点の一部みられ、同種と考えられる細線饜餿紋を異なった製作方法によるとする等の矛盾点がみられる。ここでは第二章にあげた紋様の変遷過程をふまえながら、鑄型施紋法を分析しよう。

鑄型直接施紋法によってつけられた二里岡期のa類饜餿紋は、凸になる部分が細くて先端が尖っており、反対に凹になる部分が平らで幅広かった。また、紋様を飾らない部分の器身面と紋様帯部分の凹面とが同じ高さである等の特徴があり、無紋の原型を使って鑄型を起こした後に、紋様を彫りこむという技法(図9-1)を用いたことが容易に判断できた。一方、原型施紋法によってつけられた二里岡期b類饜餿紋は、凸部が幅広くて平らであり、凹部はU字形・V字形の断面を呈している。すなわち、鑄型においては凹部が平らで幅広く、凸部がU字形・V字形に突出していたわけで、ちょうどa類の紋様の状態と同じである。よって、この鑄型を起こすための原型に紋様を彫りこんでいたと考える方が自然なのである(図9-2)。

ところが殷墟期の紋様は、早い段階から非常に複雑化すると同時に、細かい線が増加するので、紋様の凹部・凸部がほぼ同じ幅になってしまう。さらに、製品における凸部の表面は、鑄造後に削ったり研磨したりして、平らに整えた可能性がある。凹部には、手を加えていない可能性が高く、鑄上がりの状態を比較的よく保っているとは思われるが、実際には紋様帯部分が錯でふくらんだ青銅器が多く、その観察によって線の断面形などを判断することは難しい。よって、凹部や凸部の幅や断面形のみではなく、他に施紋法の判断基準となる要素を用意する必要がある。なお、原型ないしは鑄型には

あらかじめ下絵を描いた後に紋様を彫りこんでいったと思われる。その下絵こそが工人の意識上のデザインを表わすはずである。そこで便宜上、この「デザイン」をポジ (positive) 紋様、その残りの部分をネガ (negative) 紋様と呼ぶことにする。

第一に紋様帯の上下の無紋の部分との区画の線に注目してみよう。無紋の器身に対して全体にもりあがってみえる紋様帯部分は、その上下に区画の凸線が表わされ、凹部をはさんで紋様の凸部が開始するという構成になっている。区画凸線を鋳型に直接彫りこんだ場合、線の縁が真直になるように整えて彫るのが通常なので鋳型直接施紋法によってつけられた紋様の区画凸線は、縁が基本的には真直である。これに対して、原型の区画凸線と紋様のポジ部分を残して、ネガ部分を彫りくぼめようとした場合、区画凸線の縁が紋様にそった不整形を呈することがあるので、原型施紋法によってつけられた紋様にも、このような区画凸線の縁の乱れがみられる例がある (図9-15)。

第二に、線の連続性について考えてみよう。板に線を表わす時の状況を想像してみると、一般に彫りこむ線は長く思いどおりに進めることができるが、思いどおりの線を彫り残すことは容易ではない。例えば、組合わせ渦紋は、C字形の双頭渦紋が上下から絡みあう紋様がポジであると考えられるが、図9-13の觚の頸部に表わされた紋様では、これが凹部によって表わされている。このような複雑な紋様は、彫り残すよりも彫りこむことの方が容易であると考えられるから、この場合、鋳型にポジ紋様を彫り残したと考えるよりは、原型にポジ紋様を彫りこんで、鋳型を起こしたとみる方が自然である。図9-15の東京国立博物館蔵TJ四四三九壘の細線3類(新)饗餞紋の胴体は一見複雑に見えるが、凹部(拓本で白く出ている部分)に着目すると、前方より、上から巻きこむ渦が一個と下から巻きこむ渦が一個、組合わされて、胴体が表現されているのがわかる。反対に凸部(拓本で黒く出ている部分)に着目しても線が連続的でなく、凹線でみられたような紋様の構造が判別できない。この紋様は、凹の紋様こそがポジであり、やはり原型にポジ紋様を彫りこんだ後に、鋳型を起こしたとみる方が自然ではないだろうか。これらの例にみたとおり、連続的で紋様の構造を明解に示す「ポジ紋様」を表現した線が凹か凸かによって、原型施紋か鋳型直接施紋かを判断できる可能性がある。

第三に、渦紋の角につけられる小突起について検討してみよう。渦紋は一般に角ばった形に描かれるが、その四隅はまをみを持ってカーブする。二つの渦紋が接するとき、角の部分は紋様と紋様の間に隙間ができるので、渦紋の角に小さな突起をつけて間が抜けた紋様にならないように配慮する。ところでこの小突起は、先端が鋭くて線にのびがあり、あたかも楔形文字のごとく粘土を工具ではねてつけたような印象を与えるものであり、原型や鋳型に彫り残してつけたとは考えられない。だから、このような突起が凸になるものは、鋳型直接施紋であり、凹になるものは原型施紋であると考えられる。

これらの点および凹部・凸部の状態に注意して、主に甕の紋様部分を観察した。

R二〇四四甕の細線1類饗養紋は、凸線が全般に連続的で二里岡期a3類の構造をよく受け継いでおり、凸部の幅(約1mm)が凹部の幅(一・二mm)よりやや狭いため、鋳型直接施紋法による可能性が高い。R二〇三八(図9-16)・R二〇四二甕の細線2類饗養紋の上下区画線の縁は紋様にそってジグザグ状を呈する部分があり、饗養紋の胴体の最前部の渦紋

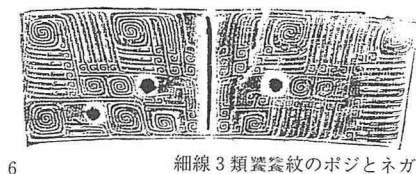
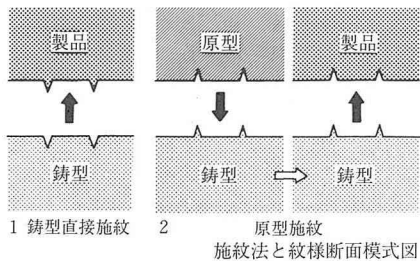


図9 鋳型施紋法

(3. 侯家庄HPKM1400: R1034甕, 4. 小屯YM232: R2005甕, 5. 小屯YM232: R2038甕, 6. 東博甕, 7. 京博甕)

は、凹部が後方へ長くのびるなど連続的であるのに対して、凸部は連続的でない。また、渦紋の角の小突起は凹で表わされている。よって、原型施紋の可能性がある。これに対して、細線3類(古)に属するR二〇四六罍の饗餞紋は、凸部幅が〇・五mm以下と非常に細くて断面も先端が尖る形であるのに対して、凹部の幅は〇・五〜一mmあり、紋様も凸部が連続的で、上下区画線が、直線的な細い凸線であるなどの点から鑄型直接施紋と考えられる。同段階の紋様を飾るR二〇〇五觚の饗餞紋(図9-4)もまた、凸部が連続的で、紋様の構造を明確に表わす点や小突起が凸である点から、鑄型直接施紋と考えられる。細線3類饗餞紋を飾る東博所蔵罍は、先述のように、凹部が連続的でボジ紋様を表わす点や、小突起が凹である点から、原型施紋であると考えられる。また、この器は、非常に鑄上がりや保存状態がよくてほとんど錆がないため、紋様部分の状態がわかりやすい。その観察によると、凹部の幅が一定であるのに対して、凸部の幅は一定でなく、凹線より全般にやや太いようである。この点からも、原型施紋である可能性が高い。R二〇三七罍も、同様に原型施紋であろう。以上より、細線1類饗餞紋は、当初鑄型直接施紋法を用いていたが、漸移的に原型施紋法を取り入れ、最終的にはすべて原型施紋法を用いるようになったといえよう。

一方、R二〇四七罍の太線1類饗餞紋は、凸部の幅が大きい点や、饗餞紋胴体などの各部分は凹部が連続的な点は二里岡期b2類饗餞紋と同様であり、原型施紋と考えられる。R二〇四五罍の太線2類饗餞紋もまた、小突起が凸で表わされる点から、また、R二〇一三觚の紋様は凸部が連続的である点や上下区画線の縁が紋様にそってジグザグ状を呈する部分がある点から、原型施紋であろう。

太線3類饗餞紋は、主紋部の幅が広く、その上に、細い凹部で渦紋が表わされている。ところが地紋の渦紋は凹部が広くて平らであるのに対して、凸部が細く、断面は頂点が尖る(図9-7)。よって、原型に彫り残された主紋の上に渦紋を表わし、鑄型を起こしてからその鑄型に地紋を彫り加えたと考えられる^②。

従って、太線饗餞紋は、当初原型施紋法を用いてつけられたが、3類の段階になって、原型施紋法と鑄型直接施紋法を

併用してつけられるようになったといふことができる。^③

輪郭饜餿紋もまた、太線3類饜餿紋と同様の手法が用いられている。すなわち、輪郭部分の太い凸線は原型に彫り残したもので、鑄型を起した後に周囲の細かい紋様を鑄型に彫りこんだと思われる。雲雷乳釘紋や鉤連雷紋も同様で、斜格子や雲雷の主紋は鑄型の合わせ目を超えて連続するから、原型に彫りこんだことが明らかであるのに対して、細かい地紋部分は鑄型の合わせ目を境に不連続であるから、分割された後の鑄型に直接彫りこんだと考えられる。^④

(2) 流派と鑄造技術

二里岡期 a 2・a 3 類饜餿紋を飾る罍は、蓋の内側の范線が蓋の中心軸に対応する位置に一本しかなく、この部分まで紋様が連続している(図10-1)。一方、二里岡期 b 2 類饜餿紋や殷墟期太線 1・2 類饜餿紋を飾る罍には、蓋の内側の范線がやはり一本しかないが、蓋の直下には、蓋と同幅分、紋様がなく(図10-2)、時には粘土をこすりつけたような擦痕が銅器の表面にみられることがある。^⑤ 二里岡期 a 2 類・a 3 類饜餿紋を飾る罍は、蓋のついた原型から鑄型を起した後にこの鑄型に紋様を彫りこむから、蓋の内側の部分にも紋様が途切れなく彫りこまれ(図10-3)、その紋様が損われることとはないのである。一方、二里岡期 b 2 類饜餿紋や殷墟期太線 1・2 類饜餿紋を飾る罍の蓋下の紋様が途切れるのは、蓋の内側に紋様を彫りこむことが困難であるためにこの部分まで紋様をつけなかった、などの理由によると思われる。ところが殷墟期細線饜餿紋を飾る罍のほとんどは、蓋の下にも紋様が連続する。鑄型直接施紋と考えられる細線 1 類饜餿紋を飾る罍については二里岡期 a 3 類と同様の解釈が成立つとしても、原型施紋と考えられる細線 2 類・3 類新 および太線 3 類饜餿紋を飾る罍については、原型に紋様を彫りこんでから蓋を取り付けるなどの技術改良が行なわれたのであろうか。今後の検討を要する。^⑥

二里岡期の罍や爵・鼎等は、口縁内部に段をつけるものが多い。特に罍には必ずこの段がみられる。この段は、口縁部

の補強のためにつけたものであるなどの説がある。殷墟期の罍ではこの段は通常みられなくなる。ところが、太線1類・2類饗鬃紋を飾る銅一期の罍には、この段が非常に薄くではあるが表わされている。このことから、殷墟銅一期には太線饗鬃紋を飾る罍のみに、二里岡期の遺制が残っていたといえよう。

このように、殷墟銅一期までの罍には、流派によって若干の技法上の差異がみられる。

次に、二里岡期の觚は、a類紋様を飾るものが铸型合わせ目に計二個の型持を設ける（図11-1）のに対して、b類紋様を飾るものが計三個の型持を用いて铸造する（図11-2）という傾向があった。一方、殷墟期の觚は、通常、二個の型持が铸型の合わせ目に設けられる。ところが、太線饗鬃紋を飾るⅠ式とⅡ式の中には各々、三個の型持を用いる例がわずかな

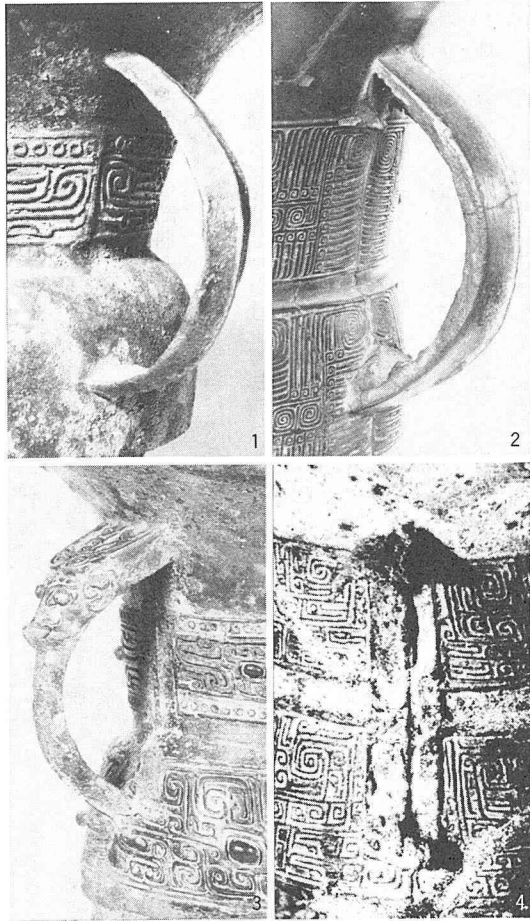


図10 罍釜内側の紋様

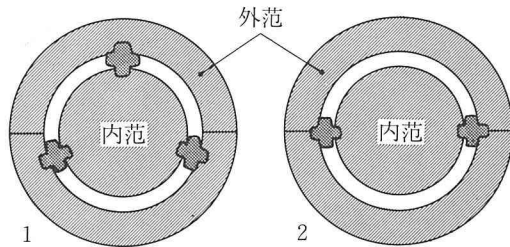


図11 觚の型持の位置模式図

がある。二里岡期の傾向とまとめて解釈すると、二里岡期以来細線派と太線派の技法は異なっていたが、殷墟期に入ってから細線派の技法に徐々に統一されていったという状況が復元できるのではないだろうか。

(3) 流派と工人群

以上の分析から、次のような事実が明らかになった。

- ① 紋様表現やデザインの異なる流派が、各器種を超えて存在する。
- ② 罍や爵は、器形や柱帽形態の異なる複数の小形式が存在するが、これらは流派の違いにも対応する。
- ③ 殷墟銅二期以降、尖葉紋や稜脊が飾られる器が非常に増加するが、それらを飾る、飾らないという約束が流派によって異なっていた可能性が高く、全般に細線饕餮紋派は尖葉紋と稜脊を飾らず、太線饕餮紋派はこれらを飾るという傾向がある。

④ 各流派は、二里岡期の施紋法の異なる二種類の紋様群から各々連続的に変化したものであり、殷墟期の初期段階にはこれらの施紋法の差異がそのまま継続されていた可能性が高く、殷墟銅二期以降にも施紋法が再度分化する。

⑤ 二里岡期から殷墟期にかけての時期に流派によって、鑄型構造や製作法上の差異が認められる例がある。

このことから、流派とは、単に紋様デザインの異なる群であるばかりではなく、元来器形や鑄型構造・施紋法など製作工程全般にかかわる差異を持つ青銅器群に対応するものであると結論づけることができる。このような群は、それを製作した工人群の差異を表わしていると考えるのが最も自然ではないだろうか。その傍証を得るために、出土鑄型を介して遺構との対応関係を検討する必要がある。

戦前に行なわれた殷墟の小屯村東北部の宮殿区の発掘では、宮殿建築遺構の下から灰坑等の遺構が発見されている。その中の数基からは、鑄型や銅渣等、青銅器生産にかかわる遺物がまとめて出土しているので、これらの遺構は、青銅器

工房または青銅器生産にかかわる遺構であると考えられる。乙区宮殿址の下層で発見された灰坑YH〇四二^⑦では、銅二期にあたる青銅器の鑄型が多数出土している。台湾所在の整理中の出土鑄型を実見したところ、胎土や焼成具合、色調等は相互に非常に似通っている。また、ここで出土した爵・觚の鑄型には、すべて尖葉紋が表わされている。罍や尊のものとみられる大型の鑄型は、判別できるものにはすべて太線饕餮紋が表わされているようであった。よって、YH〇四二は、殷墟銅二期の太線饕餮紋派の工房だったのではないかと推測する。一方、一九二九年の発掘では、「横十一丙トレンチ」で、炭や銅渣・鑄型等がかなり出土したという報告があり、この地点にも工房が存在した可能性^⑧が高い。その時出土した鑄型の報告例は管見にのぼったところでは觚の鑄型ただ一点しかないが、その鑄型には細線3類饕餮紋が表わされており、しかも他の灰坑で出土した鑄型に比べて胎土が精緻で色調も異なるという^⑨。また、発掘区の図を総合すると、YH〇四二と横十一丙トレンチの工房とは、五十～六十m離れていたと推測できる^⑩。資料数はわずかであるが、このような点から細線饕餮紋派の青銅器と太線饕餮紋派の青銅器は異なった工房で作られていた可能性がある。

二里岡期における流派が別々の工房を営んでいたかどうかは、鄭州市内の鑄造工房址出土の鑄型の詳細な報告が行なわれていないので確認できず、まして、殷墟銅一期にあたる青銅器鑄造工房は未だ発見されていないので、右記の様な推測があてはまるかどうか不明である。これらの時期については、今後の資料の増加を待って検討してみたい。

- ① 李濟・万家保『古器物研究専刊第一本 殷墟出土青銅觚形器之研究』中国考古報告集新編、南港、一九六四年、六九―七四頁
- ② R二〇四七罍やR二〇四五罍など、円圏紋を紋様帯の上下に施すものがある。円圏紋は管状の工具を鑄型に押捺してつけた紋様と考えられるが、原型から鑄型を起す場合、鑄型の粘土が乾燥して固くなるから原型からはずすとすると、工具を回転させずに鑄型に押捺することは困難ではないかと思う。しかし、実際に円圏紋の部分を観察しても、正円形であるものはなく、工具を回転させた痕跡は見当らない。

- また、円圏紋の部分には後から粘土を貼り足した痕跡もみられない。これらの器が原型施紋であるとする場合、円圏紋の施紋法は今後検討を要する課題である。
- ③ 第2章注①前掲文献p.2
- ④ 地紋が連続する部分もあるが、これは三つの鑄型のうち二つを先にあわせてから紋様を彫りこんだものと思われる。
- ⑤ 二里岡期の罍は、当初罍の両縁と対応する位置に二本の范線があるから、罍同様に罍の内側に独立した内范が設けられて、鑄造されている。

たことがわかる。この技法はほどなく鑄型と鑿の内范が一体化した技法におきかわるようである。

⑥ 細線3類(古) 鬘鬘紋を飾る罍と輪郭鬘鬘紋を飾る罍の鑿下には三本の范線があり、紋様が途切れる(図10—4)。これらは、二里岡期b類と同様な技法による。また、殷墟銅二期以降にみられる獸首を飾る部厚い鑿は、別鑄法によってつけられたものであるから、鑿下に紋様が連続することには問題はない。

⑦ 石璋如『小屯第二本 遺址的發現与發掘乙編 建築遺存』中国考古報告集之二、台北、一九五九年、七五頁

⑧ 第四章注①前掲文献および李濟・万家保『古器物研究專刊第二本 殷墟出土青銅器形器之研究』中国考古報告集新編、南港、一九六六年

⑨ 李濟『民国十八年秋季發掘殷墟之經過及其重要發現』(安陽發掘報告)第二期、一九三〇年、二四〇—二四一頁

⑩ 第四章注①前掲文献、五六頁および図版四六一—八

五 結 語

殷墟前半期は青銅器が大きく發展する時期でありながら、その青銅器の総合的かつ細かい編年は充分には行なわれていなかった。今回紋様表現の異なる二つの流派を分類し、それぞれの変化過程を明らかにした上で器形の変化の過程と対応させたことによって細かい編年案を組み立て、二里岡期からの編年案につなぎあわせることができたと思う。さらに、流派によって、施紋方法が異なること、鑄型構造等に若干の差異が認められること、異なる工房が営まれていた可能性があることなどが明らかとなり、このことから、流派の差異は工人群の差異に対応すると考えるに至った。

さらに、殷墟銅二期の工房の状況をふまえ若干の推量を含めて復元してみると、都の中に大きく二つの工人群が存在し、各々の技術や伝統を固守しつつ青銅器製作を行なっており、これらの工人群は宮殿区の中核部にごく近い場所で各々の工

⑪ 小屯村から離れた薛家庄南地遺跡でも細線鬘鬘紋の表わされた鑄型が出土している。報告の写真中の鑄型には、尖葉紋が表わされた爵の鑄型と共に羽根が退化してルジメント化した細線鬘鬘紋を飾る觚の鑄型が含まれている(趙霞光「安陽西郊の殷代文化遺址」(『文物參考資料』一九五八年第二期))。これらの鑄型は、銅三期より新しいと思われるが、詳細については、検討を要する。なお、カールベックが紹介した鑄型の収集品には、太線鬘鬘紋派の鑄型と共に細線3類鬘鬘紋の爵や觚の鑄型が含まれている。北京の骨董屋で一括して購入したので、出土地は同一であろうと推測しているが、出土遺構が同一であるとは限らぬ。(O. Karlbek, Anyang Moulds, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 7, 1935)

⑫ 河南省文化局文物工作队第一隊「鄭州商代遺址的發掘」(『考古學報』一九五七年第一期)

房を営んでいた、という当時の青銅器生産の状況が浮び上がる。但しこれらの工人群は決して排他的なものではなく、鑄造技術や器形等の変化の過程は、両流派共に共通する部分が多いから、相互に交流が行なわれていたのであろう。^①

王朝による青銅器の生産機構の支配状況についてはどのように考えられるだろうか。両派とも、都の中枢部に工房が存在することから、王朝の支配力が強く及んでいたことは明らかである。さらに、王朝と二つの流派がどの様な関係にあったかを考える上で、青銅器につけられる銘文と流派との相関関係や出土墓ごとに流派の偏向性が認められれば興味深い。今のところ殷墟銅二期以前の青銅器で銘文を持つものは非常に数が少なく、十分な分析を行なうことができなかった。^②また、小屯の中小墓や西北岡の王陵でも遺構ごとに特に偏向性はみられず、流派に特に優劣はなくて平等に扱われていたような印象を受ける。しかし、今のところ細線饕餮紋を飾る尊はA・B型共に発見されていないなど、ある程度独占的に製作する器種が存在した可能性がある。

二里岡銅三期より殷墟前半期まで、青銅器には細線饕餮紋派・太線饕餮紋派という二つの大きな流派が存在し、それぞれの流派を営む二つの工人群が競い合って青銅器生産に携わっていた。しかし、この状況は、殷墟後半期に至って、やや変化する。すなわち、大型器が盛行する中で、太線饕餮紋派の紋様から発達した派手な紋様が主流となってゆくのである。婦好墓の青銅器はまさにこの過渡的な時期のものである。したがって、殷墟前半期にみられた二つの流派が存在するという状況が、殷代全般にわたって同じ調子で続いていたとはいえず、この状況を普遍化することはできない。今後、殷墟後半期の流派の動向にも焦点をあてて、流派の分析をさらに推し進めてゆくことによって、殷王朝と青銅器生産機構との関係について一層具体的なイメージを抱くことができるようになるのではないかと期待する。

① コレクション資料中には、同一器に異なる流派の紋様が飾られる二里岡銅四期および饕餮銅二期の例が、わずかに存在する。時に共同で青銅彝器を製作することがあったのかも知れない。

② 銅三期に属する婦好墓等では、異なった流派の青銅器に同じ図象記号を飾る例があるが、流派によって字の配列や字体が異なる例がある。その分析については、別稿にて論じたい。

図版出典

- 図1 1・6 文献①図一―3・図二―4
2・5・7・8 文献②挿図二五
9 文献③二―一五七
- 図2 1 文献④挿図一三―2
2 文献②挿図二五
- 図3 1・5 文献②図版9・3・2・10・12
6 文献⑤三二九
- 図4 1 文献⑥七
2・3・4・6 文献⑩図版12・33・14・22
5・8 文献⑦135・173
7・9 文献⑤277・284
- 図5 1・5・7・9 文献⑧図版11・21・35・34・26・20・18・14
6 文献⑦一五七
- 図6 1 文献①図一―3
2・4 文献⑨挿図三二―8・3、三〇―6
- 図7 文献⑨図版25・23・34・33・20・19
- 図8 図3・5・7に同じ。ただし、銅鼎は文献⑩図版三・四・六、銅罍は文献⑨図版6、土器は第三章注⑨図六六―
- 図9 3 文献③挿図四一
4・5 文献④挿図二―2・一―1

- 6 東京国立博物館 難波採拓
- 7 京都国立博物館 難波撮影
- 図10 1 東京大学教養学部美術博物館 難波撮影
2 東京国立博物館 難波撮影
3 貝塚茂樹ほか『中国の美術』第五卷（淡交社、京都、一九八二年）図7
4 文献②19―1
- ① 表明相「鄭州商代二里岡期の青銅容器概述」〔中国考古学会第四次年會論文集 一九八三〕文物出版社、北京、一九八五年）
- ② 李濟・万家保『古器物研究專刊第三本 殷墟出土青銅器形器之研究』中国考古報告集新編、南港、一九六八年
- ③ 林巳奈夫『殷周時代青銅器紋様の研究』殷周青銅器綜覧二、吉川弘文館、東京、一九八六年
- ④ 石璋如『小屯第一本 遗址の発現与発掘 丙編 殷墟墓葬之三 南組墓葬附北組墓補遺』中国考古報告集之二、南港、一九七三年
- ⑤ 《河南出土商周青銅器》編輯組『河南出土商周青銅器』(1)、文物出版社、北京、一九八一年
- ⑥ 陝西省考古研究所他編『陝西出土商周青銅器』(1)、文物出版社、北京、一九七九年
- ⑦ 中国社会科学院考古研究所編著『殷墟青銅器』考古學專刊

乙種第二四号、北京、一九八五年）

⑧ 李濟・万家保『古器物研究專刊第一本 青銅觚形器之研究』中国考古報告集新編、南港、一九六四年

⑨ 李濟・万家保『古器物研究專刊第五本 殷墟出土伍拾參件青銅容器之研究』中国考古報告集新編、南港、一九七二年

⑩ 李濟・万家保『古器物研究專刊第四本 殷墟出土青銅鼎形器之研究』中国考古報告集新編、南港、一九七〇年

⑪ 李濟・万家保『古器物研究專刊第二本 殷墟出土青銅爵形器之研究』中国考古報告集新編、南港、一九六六年

⑫ 猛憲武「安陽三家庄発現商代窖藏青銅器」、『考古』一九八五年第一二期）

⑬ 中国社会科学院考古研究所安陽工作队「安陽殷墟三家庄東

の発掘」、『考古』一九八三年第二期）

⑭ 中国社会科学院考古研究所安陽工作队「安陽武官村北的一座殷墓」、『考古』一九七九年第二期）

⑮ 郭宝鈞「一九五〇年春殷墟発掘報告」、『中国考古学報』第五冊、一九五一年）

⑯ 中国社会科学院考古研究所安陽工作队「安陽小屯村北的兩座殷代墓」、『考古学報』一九八一年第四期）

⑰ 中国科学院考古研究所安陽工作队「一九七三年安陽小屯南地発掘簡報」、『考古』一九七五年第一期）

⑱ 李濟・董作賓・石璋如・高去尋『小屯第三本 殷墟器物甲編 陶器上輯』中国考古報告集之二、台北、一九五六年

〔謝辞〕 本稿は、平成二年度文部省科学研究費補助金奨励研究（特別研究員）「殷代青銅彝器にみられる流派とその意義」の成果の一部である。成稿にあたっては、林巴奈夫先生・小野山節先生にご指導・ご教示をいただいた。また中国考古学研究会の諸兄姉と菱田哲郎・高橋克寿両氏をはじめとする考古学研究室の諸兄姉にも、ご協力・ご教示いただいた。さらに資料の見学に際して弓場紀知・藤田まや・田辺美恵・高浜秀・谷豊信・河野圭子・外山潔・広川守の各氏に、また、一九八九年に台湾南港の中央研究院歴史語言研究所現在の資料を見学した際は、石璋如・石守謙・樋口隆康・谷川道雄・古原宏伸・曹淑慧そして蕭麗玲の各氏に大変お世話になった。これらの方々に心より御礼申し上げます。

（京都大学大学院生

Chronology and Recognition of Different Lineages of Ritual Bronzes in the Early Yin-xu Period

by

NAMBA Junko

This article will inquire into the systems of casting ritual bronzes in the society of the Yin dynasty. Only bronzes of the early Yin-xu period will be discussed.

From the late Er-li-kang period, there were two varieties of *Jia* vessels which differed not only in regard to vessel form, but also in the designs of the *Tao-tie* decoration. Because these varieties of *Tao-tie* decoration can be seen in other types of ritual bronzes, the differently decorated groups of ritual bronzes are labeled "the detailed-line lineage" and "the bold-line lineage." By examining the change of designs within each lineage, and by comprehensively studying vessel forms, the early Yin-xu period can be divided into two sub-periods.

After analyzing the relation of the lineages and the techniques of decorating moulds and casts, as well as by studying types of moulds excavated from the palace area in Xiao-tun, then placing this material within the new chronology, certain differences can be seen in the whole process of casting that accord with the differences in lineages. Thus, it can be concluded that the lineages came into existence because those groups of ritual bronzes were cast by different groups of artisans.

The Board of Revenue and the *Regulations of the Board of Revenue*

by

TANII Yoko

This article attempts to make clear the character of the supervisory functions of the central government in regard to its local governments during the Qing dynasty, and to analyze the problems that arose from